ごあいさつ

板橋区は、昭和６０年１月１日に世界の恒久平和を願い、「板橋区平和都市宣言」を行いました。以来、この宣言を実りあるものとするため、現在に至るまで様々な平和都市宣言記念事業を実施し、「戦争の悲惨さ、平和の尊さ」を訴え続けています。

『次世代を担う子どもたちに平和の大切さを伝える』このような思いを込めて、この「中学生平和の旅」を行っています。今年度も被爆地である広島及び長崎に区立中学生を各２３名、計４６名を派遣しました。この感想文集は、平和の旅を通して学んだことや感じたこと、これから先もずっと伝えていかなければならない「平和の大切さ」を、自分自身の言葉で綴ったものです。

私たちは真の世界平和を手にしたことはありません。それは、世界には今でも多くの核兵器が存在し、武力による威嚇行為が一部の権力者により行われています。また、世界では地域紛争やテロ行為などにより、現在も子どもを含む多くの犠牲者が後を絶たず、私たちの願いである世界平和の実現をより困難なものにしているからです。

先の大戦が終わって７２年が経過し、あの悲惨な体験を知らない世代が大半を占めるなか、この感想文集を一人でも多くの方にご覧いただき、「平和の尊さ、大切さ」に対する認識を深め、あらためて「平和」について考えるきっかけとなっていただければ幸いです。

これからも、板橋区は、平和都市宣言記念事業を積極的に推進し、世界の恒久平和を実現するため、様々な機会を捉えて、「平和の心」を発信してまいります。

最後になりましたが、本事業の実施にご協力いただきました、関係者の皆様方に心より感謝申し上げ、ご挨拶とさせていただきます。

平成２９年１１月

板橋区長

坂本　健

目　次

ごあいさつ　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・　1

第１部　中学生広島平和の旅
　１．行程表　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・　4
　２．団長感想文　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・　5
　３．参加中学生感想文　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・　6

第２部　中学生長崎平和の旅
　１．行程表　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・30
　２．団長感想文　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・31
　３．参加中学生感想文　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・32

第３部　資料編
　１．広島
　（１）広島市原爆死没者慰霊式並びに平和祈念式次第　・・58
　（２）平和宣言　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・59
　（３）平和への誓い　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・61
　２．長崎
　（１）長崎原爆犠牲者慰霊平和祈念式典次第　・・・・・・・63
　（２）長崎平和宣言　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・64
　（３）平和への誓い　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・66

■広島市原爆死没者慰霊式並びに平和祈念式出席議員

田中　しゅんすけ	議員	田中　やすのり	議員
中野　くにひこ	議員	小林　おとみ	議員
高沢　一基	議員	松崎　いたる	議員

■長崎原爆犠牲者慰霊平和祈念式典出席議員

杉田　ひろし	議員	安井　一郎	議員
松岡　しげゆき	議員	なんば　英一	議員
大田　伸一	議員	長瀬　達也	議員

第１部

第２３回 中学生広島平和の旅

原爆ドーム前にて

参加生徒

板橋第一中学校	豊岡　重賢	志村第四中学校	小川晋太郎	向原中学校	伊東　陽希
板橋第二中学校	中島　彩花	志村第五中学校	真田　澪	赤塚第一中学校	中庭くるみ
板橋第三中学校	髙橋　明愛	西台中学校	布施佳奈子	赤塚第二中学校	大久保聡美
板橋第五中学校	米山　京吾	中台中学校	戸谷さゆり	赤塚第三中学校	山岸　洋太
加賀中学校	白井　保	上板橋第一中学校	山﨑　優音	高島第一中学校	馬場　悠人
志村第一中学校	白石　征也	上板橋第二中学校	髙城　愛菜	高島第二中学校	波多江南月
志村第二中学校	松田　理玖	上板橋第三中学校	尾嵜　夏帆	高島第三中学校	市東　美紗
志村第三中学校	福田　凜佳	桜川中学校	石川　七海		

引率者

高島第二中学校　香積　信明校長（団長）　片岡　美佳教諭（指導員）　山岡　裕基子教諭（指導員）

中学生広島平和の旅　行程表

実施期間　平成２９年８月５日～７日（２泊３日）

８月５日（土）

時　間	行動内容
7:15	板橋区役所集合・出発式
7:40	板橋区役所　発
8:15	東京駅　着
8:40	東京駅　発
12:40	広島駅　着
12:50	広島駅　発（市電）
13:30	平和記念資料館　着
14:00～15:30	★平和学習会（原爆被害の概要説明） ★慰霊碑ガイド
15:30～17:30	平和記念資料館等見学
17:45	ホテル　着
19:00	夕食
22:00	就寝

８月６日（日）

時　間	行動内容
5:00	起床
6:00	朝食
6:40	ホテル　発（徒歩）
6:50	平和記念公園　着
8:00～9:00	平和式典参列
9:30～14:00	観光・昼食
15:00	ホテル　着
15:30～17:30	学習会
18:00	灯篭流し体験
19:00	夕食
19:50	灯篭流し見学
22:00	就寝

８月７日（月）

時　間	行動内容
6:00	起床
7:00	朝食
9:30～10:30	被爆体験講話会
10:50	ホテル発（観光バス）
11:00	平和記念公園　着（献花）
11:15	平和記念公園　発（観光バス）
11:30	広島駅　着
12:30	広島駅　発
16:30	東京駅　着
17:20	板橋区役所着・解散式

★は中・高校生ピースクラブ開催事業（広島市主催）

平和のバトンを引き継いでいく

第２３回中学生広島平和の旅
団　長　　香　積　信　明
（高島第二中学校長）

戦後７２年がたち、日本では平和が当たり前、戦争を知らない世代が８割以上にもなっています。ここに至るまでは、戦争の悲惨さに苦しみ、二度と悲しい思いをしないようにと、多くの人が願い、努力してきたからです。今回の広島平和の旅で、平和が当たり前のように思い、日々を過ごしていることに改めて気づきました。

第 23 回「中学生広島平和の旅」では、各校の代表 23 名が、平和の尊さ、戦争の悲惨さを伝えようという意識をもって集まりました。事前学習で学んだことをもとに、３日間を過ごしました。広島では「中・高生ピースクラブ」による平和学習会・平和公園内の被爆遺構の見学、平和記念資料館への訪問、「平和記念式典」への列席、灯篭流し、「被爆体験講話」を経験し生徒たちは、大きな衝撃を受けるとともに、平和への意識をより高めていくことができたと思います。

宿舎での学習会では、「私たちが、もっと優しく積極的に外国の方に接することも平和を守っていく一つ方法ではないか」という意見があり、その後の灯篭流しに参加した時には、外国の方に話しかけ、コミュニケーションをとっていく生徒の姿がありました。「中学生広島平和の旅」の目的「戦争の悲惨さ、平和の尊さ」を考え、平和に対する意識が大きく高まったものと思います。

「被爆体験講話」では、原爆の直接被害だけでなく、終戦後の家族を失った子供たちの様子やその後の差別による苦しみを、どのようにして乗り越えてきたのかを伺いました。生徒たちには、想像を絶するような体験を聞き、さらに「平和」を守っていくことの責任を感じたと思います。

「平和記念式典」での松井一實広島市長の平和宣言の中に、「被爆の実相を見て、被爆者の話を聞き、きのこ雲の下で何が起きたのかを知り、被爆者の核兵器廃絶の願いを受けとめた上で世界中に共感の輪を広げたい。特に若い人には広島を訪れ『非核大使』として友情の輪を広げていただきたい」という言葉がありました。板橋の代表生徒 23 人は、３日間の「広島平和の旅」の貴重な体験を通して、戦争の、核兵器の悲惨さを知り、平和の大切さをより深く学び、友情の輪を作ってきました。生徒たちは、この友情の輪をさらに広げながら、今回の体験を各学校の仲間に、板橋区民の方に、日本中に世界に伝え、平和な社会を作ってくれると信じています。

このたび、平和の大切さを改めて学ぶ機会をいただきましたことを深く感謝申し上げます。核兵器・戦争の悲惨さ、平和の大切さを語り引き継いでいくために、広島平和の旅で、「平和のバトン」を受け取ってきました。このバトンを多くの人に渡していくことが、私たちの役割になりました。「平和のバトン」が板橋から世界中に伝わることを願っています。

被爆地広島を訪れて

板橋第一中学校　２年　豊岡　重賢

僕が被爆地広島を訪れて最初に思った事は、原爆を落とされた面影はなく、きれいな街だということです。しかし、原爆ドームの近くに行くと、つい先ほどまできれいだと思っていた街で、過去にこんなに悲惨なことがあったのだと思いました。

１日目の原爆資料館では、原爆ドームの被爆前、被爆後の模型がとても印象に残りました。原爆が建物を一瞬にして破壊してしまったというのが分かり、それを物語るように時計は８時１５分に止まっていました。それを見ただけでも、原爆の恐ろしさが十分に分かりました。そのほかの展示物もどれほど原爆が悲惨であり、酷い物であるかが分かりました。またピースクラブの平和学習会では、今まで知らなかった原爆の仕組みや原爆が落ちるまでの出来事が分かりました。

２日目の平和記念式典では、今までテレビで見ていた時にはあまり考えなかった、話の意味や内容が分かりました。式典で気付いたことは２つあります。１つ目は、外国人の方々が沢山いてこんなにも平和に関心があるのだということです。２つ目は、式典の日はとても暑く、７２年前の８月６日もこのような暑さで原爆が落ちたときにはこの何倍、何十倍、何百倍、何千倍も熱くて苦しい思いをしながら水を求めていたのではないかということです。その後の灯篭流しでは、川の上に浮かんでいる灯篭に様々な人の平和の思いが書かれていました。皆の平和への思いは変わらないことが分かりました。

３日目は被爆者の話を聞いて、資料館では知り得なかったことを知りました。被爆者が何も食べられず仲間が餓死していくところを見て辛かったこと、大人になっても結婚させてもらえなくて悲しかったことなど被爆者がどんな思いで今日まで生きてきたかが分かりました。

今回の広島平和の旅で学んだことは、これから核兵器とどのように向き合っていくか、どのようにこれらを次の世代に伝えていくかです。そこで僕が考えたのは、昔のことを許し合い、核兵器廃絶を目指して、各国が手を取り合い助け合って話し合いをしなければ、核兵器廃絶は無理だということです。今すぐには難しい事もあるかもしれませんが、時間をかけてゆっくり話し合っていければいつか必ず平和と言える日が来るはずです。そのために次の世代にどれだけ核兵器が怖いかを伝えなければいけません。いつか平和と言える日まで伝えていくことが僕たちの使命だと思います。

平和な世界を未来へ

板橋第二中学校　２年　中島　彩花

１９４５年８月６日午前８時１５分。広島で多くの命が失われました。
たった一発の原爆で、たった一瞬で。

１日目《中・高校生ピースクラブ・平和記念資料館》

広島に投下されたリトルボーイは熱線、放射線、爆風、全てが一度に放たれ、大きな破壊力となり多くの罪のない人を殺しました。そのような悲惨さから目を背けず、多くの人に伝えているピースクラブの活動を私もしていけたらと思います。平和記念資料館では実物や写真を見ることで、核兵器の恐ろしさを間近で見たように感じました。原爆は命だけでなく愛、夢、希望までも踏みにじりました。決して許されることではありません。

２日目《平和記念式典・灯篭流し》

平和記念式典の参列者のなかには被爆者の方だけでなく小さい子供や外国人もいました。１分間の黙とうではそこにいる全ての人が平和の尊さを考え、そして世界平和を願ったと思います。「安らかに眠ってください。過ちは繰り返しませぬから」とかかれている原爆死没者慰霊碑も印象に残りました。灯篭流しでは、平和への願いを心を込めて書き、流しました。外国語で書かれている灯篭もあり驚きましたが、平和を思う気持ちは同じなのだなと嬉しくなりました。

３日目《被爆体験講話会》

被爆者、川本さんの体験談を聞きました。薬がなく皮膚が垂れ下がったままの人、水を求めたと思われる死体でいっぱいの川。原爆からわずか一ヶ月後に訪れ、死んだ人の骨以外全て取り除いた台風。苦しい日々だったと思います。特に衝撃的だったのは戦争孤児です。原爆で親を亡くし、食べ物を食べるために暴力団についていく。小さい子供が飢えや寒さに毎日戦っていた。そう思うと今の自分が本当に不自由のない暮らしができているのだなと感じます。「表面を平和にするだけでなく、中身も平和になってほしい。」と言う言葉も心に残りました。世界中全ての人が不自由なく暮らせること、それが本当の平和だと思います。

《まとめ》

戦争をすることは人がお互いに傷つけ合う、意味のないことです。また核兵器は一度にたくさんの罪のない人の命を奪います。二度と同じ過ちは繰り返してはいけません。そのためにこの平和の旅で学んだことを生かして戦争の悲惨さを後世に伝え、平和な未来へつなげていきたいと思います。

「伝える」という使命

板橋第三中学校　２年　髙橋　明愛

1945 年 8 月 6 日 8 時 15 分に世界初の原子爆弾が広島の上空に放たれた。広島の街は約 3000℃の熱線と凄まじい爆風に襲われた。人々の皮膚は焼けただれ、飛び散ったガラスの破片が肌を突き刺した。核兵器は地上に残り人の体を蝕んだ。この爪痕は今でも残っている。

《平和記念公園》

平和記念公園では、平和を広める活動をしている「ピースクラブ」の方に、平和記念公園を説明していただきながら、見学した。

この記念公園は、原爆ドームと原爆死没者慰霊碑と祈りの泉と原爆資料館本館が一直線になるようになっている。また、ほかにも記念公園には原爆供養塔や平和の鐘、韓国人慰霊碑など死没者を弔う場所があり、心が痛んだ。

《平和記念資料館》

資料館では「8 時 15 分で止まった時計」や「変形したガラス瓶」や「原爆ドームの元の模型」などの様々な資料が展示されていた。私は「水がほしかったのです」という作品に心打たれた。これは女の子が黒い雨でもほしがって口を開けているところを示した絵と詩だ。雨が黒くなるのは爆発後に空に舞い上がったちりやほこりが原因である。そしてこの汚い雨を飲みたくなってしまうほど、とてもとても体が熱く、火傷してしまっているというところを想像し、とても悲しくなった。

《被爆者講話会》

被爆者の川本さんは原爆が落ちたあとの被爆者の辛い人生を語ってくれた。川本さんは当時、学童疎開をしており、生き残った家族が迎えに来てくれたそうだ。だが中には家族が迎えに来ず、寺院などに残って生活したり、孤児となって街を彷徨うことになってしまった子もいたと川本さんは言っていた。その後川本さんは家がなくなってしまったため親戚の家にお世話になった。

大人になった川本さんは学歴がないため職に就けず、路頭に迷ってしまった。また、結婚をしたくても汚染されていると言われできなかったという。

このように辛い人生を送ってきた人は他にもたくさんいて、なかには孤児のまま飢えて亡くなった人もいるそうだ。

《平和を伝える》

私はこの三日間を通して平和を「伝える」という使命が私たち若者にあるのだと感じた。被爆者の平均年齢が 81 歳を超えた今、伝えることができる人が減ってきている。また、川本さんのような実際に経験した方しか分からない出来事なども伝える必要があると思う。

広島平和の旅で感じたこと

板橋第五中学校　２年　米山　京吾

広島平和の旅を通して、原爆による被害の悲惨さを見学し、体験談を聞くことができ、非常に貴重な体験をさせて頂きました。

私が最も印象に残ったことは、被爆者の方の体験講話です。「50km 離れた場所に疎開して、原爆からは逃れられたが、帰ってきても家族がいないから帰るところがなかった。」というお話を伺いました。原爆は被爆者だけでなく、被爆から逃れられた人も苦しめることを知りました。そして、「施設に入ることができた人もいたが、その何倍もの子供が路上生活を送った。子供達は、食べる物がなく、石をなめ、新聞をしゃぶり、食べ物を人から奪って食べたりしていた。」そうです。家族を失い、食べる物のない子供のことを考えると、今までに感じたことがないほど心が痛くなりました。それと同時に、今の自分の生活のありがたさを感じました。

「原爆を落としたアメリカに対して、どう思いますか。」という質問に対して、「確かに憎い。しかし、過去のことをずっと言い続けるのはだめだ。乗り越えて行かなければいけない。」というお答えでした。家族や人生をめちゃくちゃにされたのに、前向きなお考えに感動しました。深いお話なので、大人になるまで考えていきたいです。

原爆資料館では、当時の生々しい悲惨な状況を目の当たりにする連続でした。私にとって最も印象的だったのは、「しんいち君の三輪車」です。事前学習のときに本で読んだときから、実物を見たいと思っていました。写真とは比べものにならず実物から衝撃を受けました。３歳のしんいち君は、ずっと欲しがっていた三輪車がようやく手に入って、大切に乗っていたのです。一緒に被爆した三輪車を見ると胸が締め付けられました。小さな子供の命をも奪った戦争・原爆の恐ろしさを実感し、悲しみとともに強い怒りを感じました。

今僕は、このようなことを絶対に繰り返してはいけないと痛感し、そのために何が自分にできるのかと考えています。今回の平和の旅で私が体験したことを永遠に忘れることなく、周りの人達に伝え、真剣に考える輪を広げていきたいと思います。

今回の旅を通して、感じていることがもう一つあります。それは、今自分が当たり前に食べたり、学んだりしていること、あらゆることが当たり前のことではないんだ、当たり前と考えずに感謝したいということです。この旅で得たこの気持ちを忘れてはいけないと思っています。

最後に、今回の旅でお世話になりました、先生方・板橋区役所の方々・現地の方々に心から感謝いたします。

『「平和」の旅』

加賀中学校　２年　白井　保

「平和」。誰にでもあるべきもの。

1945 年 8 月 6 日に広島にいた人びとはこの「平和」を奪われました。僕は広島で、さまざまなことを学び、「平和」について考えることができました。旅の途中で考えた「平和」について二つ書きます。

一つ目は人々の「平和」を奪った原子爆弾「リトルボーイ」についてです。平和の旅のテーマでもある原爆を学び、思ったことがあります。それは「原爆ひとつで数多くの人の人生が変えられてしまう」ということです。一日目の平和記念資料館、三日目の被爆体験講話では被爆者の方の生の声を聞くことができました。平和記念資料館では焼け焦げた三輪車、白米の入った弁当箱、当時の日常の生活とそれが一瞬で失われたことを知りました。また、被爆体験講話で被爆者の方がおっしゃった「原爆が落ちるまでは日常を送っていた」ということを伺いましたが、三日間で原爆がいったいどれだけの数の人の人生を狂わせてしまったかがわかります。原爆は科学技術を応用したもので、瞬間的に原爆ひとつにより数十万という数の人の命を奪います。家族、親戚、友達を奪い、とても大きな怪我を負わせ、がんや白血病にさせ、人生を狂わす恐ろしい威力を持っています。

特に心を動かされたのは平和記念資料館の原爆投下直後のシミュレーション映像です。その日の投下される前の様子、投下直後に一瞬で建物が壊滅した様子がよく分かります。その映像を見て、市内には何万人もの人がいて、亡くなったのだと知りました。

二つ目は亡くなってからも「平和」を祈る慰霊・追悼の精神です。平和記念公園には数多くのオブジェがあり、それら一つひとつに慰霊・追悼の精神があることがわかりました。二日目の平和記念式典では、献水、黙祷など、被爆し亡くなった人を慰霊することがたくさんありました。また、広島市長の言葉や国連事務総長の言葉、その言葉にもその精神がありました。川本さんは、「原爆を落としたアメリカを恨んでいますか」という質問に対し、「恨んではいるがその気持ちを乗り越えていくのが大切である」と答えていました。恨みを乗り越え、亡くなった人を弔い、将来を平和にすることが必要だと僕は考えました。この精神を平和への原動力として前に進んでいくことが必要なのです。

平和の旅は「平和」とは何かを考えさせてくれる貴重な経験でした。とても有意義な体験をさせていただきました。

原子爆弾の脅威～広島平和の旅を通じて、僕が感じたこと～

志村第一中学校　２年　白石　征也

1.　原爆投下

今から 72 年前の 1945 年 8 月 6 日。

いつもと同じ風景の広島に、原子爆弾が投下されました。世界で初めての原子爆弾の投下でした。投下された日からその年の終わりまでに、およそ 14 万人の人々が亡くなりました。また原子爆弾は、高温の熱線と大量の放射能を放出しました。原子爆弾の影響は膨大なものでした。なぜこのような原子爆弾を落とさなければならなかったのか、僕は心から疑問に思います。なぜなら、原子爆弾で関係のない大勢の人々が殺されてしまったのは、とても悲しいことだからです。

2.　原爆による被害

爆心地から 1.4 キロの範囲にいた人々は即死､爆心地から 3.5 キロの範囲にいた人々は、火傷を負ったり、放射能を浴びたりしました。僕は、「原子爆弾は最強最悪の兵器だから、絶対に使ってはいけない兵器」と聞いていましたが、なぜ使ってはいけない兵器なのかはよく分かっていませんでした。

でも、「広島平和の旅」を通じて、原子爆弾の脅威を知る事ができ、本当に使ってはいけない兵器だということを痛感しました。それは、投下時の惨劇だけでなく、投下後もずっと続く後遺症があるからです。

原子爆弾は、投下後も被爆した人々の人生に、様々な影響を与え続けています。原子爆弾により発生した放射能を浴びてしまった人々は、その後もケロイドという皮膚病にかかったり、癌をわずらったりしています。

原子爆弾投下から 72 年経過した今でも、この後遺症を負った生活を強いられている人々がいるのです。原子爆弾は、瞬間の被害はもちろん、後にも人々を苦しめる最強最悪の兵器だと知り、恐怖を感じました。そして、その恐ろしい原子爆弾は、核兵器として現在もつくられ続けていることに驚きました。

3.　まとめ

広島に、原子爆弾が投下された事は、まぎれもない真実です。また、被爆したのは世界でも日本だけです。だからこそ、唯一の被爆国である日本はこのような悲惨な事を二度と繰り返さないよう、原子爆弾の脅威を後世に、そして世界に伝えていく責任があると感じました。僕は、被爆した人々の現状を真摯に受け止め、原子爆弾を世界から根絶しなければならないと思いました。世界から核兵器がなくなる事を切に願い、世界が平和になる事を強く望みます。

平和の尊さ

志村第二中学校　２年　松田　理玖

７２年前の８月６日、８時１５分。広島に一発の原子爆弾が投下されました。きのこ雲の下で多くの人の命と生活が、奪われました。

＜原爆資料館＞

ここでは、資料のひとつひとつから戦争の悲惨さを感じました。特に印象に残ったのは、右の写真の
「核実験を目撃させられ、皮膚がんを発症した住民」
です。ただ目撃しただけなのに大きなダメージを与えるのだな、と核兵器の威力を改めて感じました。

＜平和記念式典＞

平和を願う大切な時間となりました。平和の鐘は静寂の中に響き渡り、僕のこころのなかにも響きました。また、平和への誓いでの「戦争の事実を正しく学ぶことは必要です」という言葉も僕には響きました。

＜灯篭流し＞

この体験では、様々な人の平和への思いを感じました。７２年前、この川に多くの死体が浮かんでいたことを考えると胸が締め付けられました。
みんなが灯篭に書いた思いが世界に届いてほしいです。

＜被爆体験談を聞いて＞

被爆後の広島について語ってくれた川本さんは、「ヤクザが来て喧嘩のまちになってしまった」と言っていました。僕は、このことを聞いて「原爆は広島から秩序までを奪ってしまったのだ」と悲しくなりました。

＜最後に＞

今回の平和の旅に参加して改めて、戦争は人類で最悪の行為だ、と思いました。旅で学んだことを、未来の恒久平和にむけて伝えていきたいです。

受け継がれる想い　受け継いでいく想い

志村第三中学校　２年　福田　凜佳

家族がいる、おいしいごはんを食べられる、現在は些細なことと思われるその日常がどれほど尊く幸せなことなのか。本当の意味で私たちは気づいていないかもしれません。

1945 年 8 月 6 日 8 時 15 分、広島。全ての日常、笑顔、夢が奪われました。なぜ、それらは奪われなければいけなかったのか。今、それに答えられる人はいるのでしょうか。原爆が落とされたあの現実を受け入れられる理由など、この先も見つかることはないのだと思います。

私が広島を訪れて一番に感じたこと、それは戦争をする意義などどこにも存在しないのだという底なしの悲しみでした。ならばせめて二度とこの現実を繰り返さないために、今の生活に感謝をし、戦争の悲惨な過去を伝えていかなければいけないと強く思いました。

原爆ドームを自分の目で見たことがありますか。私は当時の惨劇、人々の苦しみ、悲しみを決して知り尽くすことができずとも、一瞬にして全身震えるほどの恐怖に襲われました。この現実は広島に来た私だから感じ得たことのように思います。

2 日目の夜に、私たちは灯篭流しを体験しました。色紙に平和への思いを託し、流す様子を見ていると私の心は温かくなり、しかしなぜだか切なさが胸を締め付けました。

広島では、言葉で説明が難しい感情や、実物に見て触れ、原爆の恐ろしさを何度も感じました。私は自分の言葉で現実を伝え、受け継いでいくのが唯一できる使命だと感じました。それが平和への第一歩で、今日まで日本のこの現実を知らずに生きてきた私ができる、せめてもの償いにしたいと思いました。

被爆者の方は過去を振り返り、責め合っていては同じことが繰り返されるだけだと私たちに伝えてくださいました。また、「原子爆弾を落とし、自分の家族を殺したアメリカは憎い、憎いけれど戦争は誰が悪いとか責められない。みんな必死になるしかなかった。」と話してくださいました。それは戦争が作り出した狂気でしかないと。そして平和へは偽りなく、話し合うことが大切だとも。

私たちは「平和が一番」と言いながら本当に偽りなく、「正義とはなにか」と日々惑わされず生きられているでしょうか。私たちはお互いを思いやる行動をとれているでしょうか。私はまだできていません。人間どうしても腹が立ってしまうことはあると思います。しかし「ごめんなさい」と言えることが大切だと私は思います。そして、戦争を起こさぬよう私たちにでもできること、家族、友達と話し合っていくことが大切だと思います。私たちが立ち上がり、平和を伝え、世界中の人々が笑顔であふれるように、まずは現実を語り継ぐという行動を起こすべきだと思います。

広島平和の旅を終えて

志村第四中学校　２年　小川　晋太郎

私は、８月５日から８月７日までの「広島平和の旅」を通じて今の日本の平和のありがたさを改めて感じました。

「平和記念公園を見学して」

１日目に私たちは平和記念公園を見学しました。僕がその中で特に衝撃を受けたのは平和記念資料館です。そこには原爆による激しい熱で丸焦げになってしまった衣服、被爆者の方の身体の中に実際に入っていたガラス片、着物の柄が皮膚にくっきり写っている女性の実寸写真など目をそらしたくなるような生々しいものがたくさんありました。今まで本の中の小さな写真や、人から話でしか知ることができなかった原爆の恐ろしさをより感じることができました。

「平和記念式典を終えて」

２日目には、平和記念式典に参加しました。その式典はたくさんの人が参加していました。私たちのように全国の中学生団体、被爆された方に加えて８０ヵ国の方々が参加していました。遠い国から飛行機に乗り広島で行われる式典に参列する海外の国の方々を見て日本だけが原爆のない平和な世界にしたいと願っているのではなく、世界のたくさんの人たちも願っているのだと強く伝わってきました。

「被爆者の方の話を聞いて」

３日目には、原爆により孤児になった方の話を聞かせていただきました。その方は放射能で被爆したものの幸い無事でした。しかし原爆によって家族の命が奪われたそうです。被爆した時の年齢は今の私たちと同じくらいの年でした。同じことが今私たちに起こったらと想像するととても胸が痛くなります。当時被爆して服が体にくっついてはがれない人はてんぷら油を塗ってはがして治療したと言います。またその人は結婚しようと思っても相手の両親から「放射能に汚染しているからダメ」と言われたそうです。私はこのことから原爆は人の心と体を傷つけるだけでなく、これから先の人生をも大きく傷つけてしまう恐ろしい兵器ということを知りました。

「旅を終えて」

今回の平和の旅で戦争の悲惨さ、今の平和のありがたさを実感しました。二度と戦争を起こさないために周囲の人に今回の経験をたくさん話して伝えていきたいです。

ヒロシマを知る、伝えていく

志村第五中学校　２年　真田　澪

１９４５年８月６日、午前８時１５分。その時何が起こったのかは知っていても、詳細を知っている人がどれほどいるでしょう。広島にいる人々が、「今日も頑張ろう」、「さあ、新しい１日が始まるぞ」と思っていたその瞬間でした。広島に、原子爆弾が投下されたのは。今回の旅で知ったその後のできごとはとても衝撃的で、言葉に表すことは難しいのですが、述べてみたいと思います。

《中・高校生ピースクラブ開催事業に参加して》

中・高校生ピースクラブ開催事業では、広島に原爆が投下されるまでの経緯や、原爆の仕組み、原爆による被害を学び、平和記念公園を見学しました。その中で一番心に残ったのは平和記念公園内にある、レストハウスの地下室です。レストハウスは、もともと呉服店だったのが閉鎖され、その後は燃料会館と呼ばれていました。爆心地から１７０ｍの場所にあった燃料会館は地下室を除いて全焼。たまたま地下室に資料を取りに来ていた方だけが生き残り、地上にいた方々は全員亡くなりました。地上の光景を見て、地下室にいた方は「生き残ったのは幸運だったのか。自分だけが生き残って良かったのか」という罪悪感に襲われたそうです。原爆は生き残った人にさえ、身体や心に傷を負わせる、とても残酷なものだということがわかりました。

《平和記念式典に参列して》

式典には、約８０ヶ国の人々が参加していました。思ったよりも様々な国の人がいて、どの国でも平和を願う気持ちは変わらないのだな、と感動しました。子ども代表の誓いに、「未来の人に、戦争の体験は不要です」という言葉がありました。私はこの言葉を聞いて心を打たれました。人々を絶望のどん底に突き落とした戦争をもう２度と繰り返してはならないと感じ、平和とは何かを考えさせられる、心に響く言葉でした。

《最後に》

広島平和の旅の３日間は、この文だけでは伝えきれません。私にとってこの３日間は、平和について改めて考える機会であり、ヒロシマを目で見て、感じることができる、充実した日々でした。私は、この旅で学んだことを、友人や家族に伝え、理解しあっていきたいと思います。「伝える」ことこそ、広島に行った私たちができる、平和への一歩ではないでしょうか。そして、私が考える平和は、「皆が当たり前のように笑顔でいられること」です。戦争は人々から笑顔を奪います。しかし、皆が笑っていれば、戦争は起こらないと思います。そのために、身の周りで起こっている喧嘩、いじめをなくしていきたいです。

最後になりますが、このような貴重な体験をさせてくださった先生方、板橋区役所の皆様、広島の皆様、本当にありがとうございました。

平和とは何か

西台中学校　２年　布施　佳奈子

72 年前、8 月 6 日午前 8 時 15 分、雲一つない空に一発の原子爆弾が投下され、広島の街は一瞬にして焼け野原となりました。

私は今回、広島平和の旅に参加し、平和について深く学びました。

1 日目

広島平和記念資料館の見学をしました。

資料館では、原爆で苦しみながら亡くなった方々の遺品の展示や、遺族の方々の証言を見ることができ、同時に核兵器の恐ろしさ、平和への取り組みを学ぶことができました。特に強く印象に残ったものは、佐々木禎子さんの折り鶴です。2 歳の時に被爆した禎子さんは、小学校 6 年生の時に突然白血病を発症しました。翌年 2 月に入院した際、回復を願って折り続けた折り鶴であることを知り、亡くなるまで諦めず回復を願っていた禎子さんの強い心に胸を打たれました。

2 日目

平和記念式典に参加しました。

一人ひとりがもっている平和への強い思い、広島市長をはじめとする多くの方々からの献花、平和宣言、平和への誓い、黙とう、それらすべてが私たちの心に訴えるものがあり、1 時間という時間がとても短く感じられました。平和宣言では、「誠実」、「良心」、「共感」という言葉を松井一實広島市長は仰っていました。これらの言葉は式典に参列した多くの人たちの心に強く響いてくるものでした。

3 日目

被爆体験講話会

「孤児になった子がいることを誰も知らない。」語り部の川本さんは何度も同じような言葉を繰り返していました。終戦後、広島には 2 千人近くの孤児が集まったそうです。その中には、「引き取られた子がいる一方、空腹に耐えられず石をくわえてなくなっていった子どもたちも大勢いる。」川本さんはそう仰いました。このお話は資料館にはない貴重なものです。私はこのお話を聞き、終戦後、病気以外にもつらい事実があったことを知り、とても胸が苦しくなりました。

まとめ

平和とは必ずしも戦争や争いがないだけの世界ではない。一人ひとりが仲良く、共存しあうことこそが本当の「平和」なのではないか。改めてそうした気持ちにさせられた、貴重な 3 日間でした。

72年目の広島の心

中台中学校　２年　戸谷　さゆり

～はじめに～

皆さんは、「１９４５年８月６日８時１５分」この年、日付、時間を見て何という言葉を思い浮かべますか？

～平和の旅での学び～

私が今回の旅で学んだことは主に３つあります。１つ目は、「被爆の実相」です。１日目に私達は「中・高校生ピースクラブ開催事業」への参加、平和記念公園と平和記念資料館の見学を行いました。ピースクラブの方々に、原爆投下直後の広島の姿や広島に投下された原子爆弾などの説明を受け、資料館では被爆したたくさんの物や原爆投下直後が描かれた絵を見ました。原爆ドームも見ました。心が締め付けられるような感覚になりました。自分の耳で聞いて、自分の目で見て、被爆の実相を学ぶことができました。

２つ目は、「被爆者の想い」です。３日目に「被爆体験講話会」がありました。私達に被爆体験を語ってくれたのは川本省三さんでした。川本さんからの話から、たくさんの学びと衝撃を受けましたが特に印象に残ったのは、最後の質問のときの話です。同じ班の人が「原爆を落としたアメリカに対してどういう感情がありますか？」と質問すると、川本さんは「憎い。ただただ憎いよ。でも、起きてしまったことはどうしようもない。切り替えて自分にできること精一杯やることが平和へ繋がると思うよ。」とおっしゃいました。また、私が「これからの広島に向けて何を願いますか？」と質問したときは、「笑顔の溢れる広島になってほしい。」ともおっしゃっていました。この講話会で被爆者である川本さんの様々な想いを知ることができました。

そして３つ目は「被爆の記憶を風化させないために何ができるか」です。２日目に私達は平和記念式典」に参列しました。広島市の代表としてたくさんの方々がスピーチ行っていました。式辞を行った広島市議会議長の永田雅紀さんは、「平和を希求する人たちと共に手を取り合って全力を尽くしたい」と平和宣言を行った広島市長の松井一實さんは「被爆者の証言を聴いていただきたい。若い人たちには、広島を訪れ非核大使として友情の輪を広げていただきたい」とおっしゃっていました。私はたくさんのスピーチを聞いて、私ができることはたくさんあると感じました。中でも、今回の旅で学んだこと、今回の旅で聞いた被爆者の想いをたくさんの人に伝えることが、今の私が積極的に行える大事なことだと思います。

～最後に～

私は平和の旅でたくさんのことを学び、たくさんの想いを知り、自分に何ができるか考えました。このことを私はたくさんの人に伝えて、たくさんの人に主張していきます。そして、「１９４５年８月６日８時１５分」を見て世界中の人が広島を思い浮かべ、平和について考えられるようになってほしいです。

広島で学んだこと　　私の義務

上板橋第一中学校　２年　山﨑　優音

資料館で…

私は、平和記念資料館にある１枚の写真がとても印象に残りました。その写真に写っていたのは、口以外どこに何があるのかまったくわからない顔です。私は、漫画やアニメで原子爆弾の被害を見たことがありますが、どれも目や鼻の位置がちゃんとわかりました。しかし実際には、熱線で焼けたところはかさぶたのようにでこぼこしていました。写真は白黒だったので色は良く分かりませんでした。でも、もし色が付いていたら私はその写真を、じっくり見ていられなかったと思います。

72 年前、広島ではこのような被害にあった人達が何万人もいました。あなたは想像できますか。小説などにも、当時の状況が書かれていますが、実際に見たり体験したりしないと本当の様子は分からないと思います。

原子爆弾の熱線の温度も同じです。原子爆弾が爆発したときの地面の温度は 3000 度～4000 度でした。これは、鉄や金、銅などが蒸発できる温度なのです。広島の人達は、金属を蒸発させることが出来る温度に 3 秒間もさらされたのです。熱されたフライパンを、触れた時の熱さの何百倍も熱いのです。それも 3 秒間。その時の痛みを、想像できますか。想像できません。いや、想像したくありません。

被爆者のお話を聞いて…

3 日目、私達は被爆者の川本さんのお話を聞きました。その話は、当時 6 年生の川本さんが学童疎開の三次(広島県)から広島に戻ってからのことについてです。学童疎開をした子供達(約 2700 人の小学 3 年生～6 年生)は、原子爆弾で家族や家を失いました。約 700 人は、引き取られましたが、残りの約 2000 人は路上生活をしていました。

この路上生活を送っていた子供達は何を食べていたと思いますか？それは、新聞です。現在は何枚かが集まって 1 部ですが、当時は 1 枚で 1 部でした。子供達はその当時、新聞を水と一緒に流し込んで食べていたのです。そして、それが当たり前だったのです。今はどうでしょう。毎日 3 食、食べられますよね。あなたは、食べ物を粗末にしていませんか。今の私達の当たり前は、その当時の当たり前ではないのです。又、学べることも当たり前ではありません。戦時中、日本は他国のことを調べると罰せられたそうです。

私は、今回の広島平和の旅で原子爆弾の悲惨さ、平和の大切さを学びました。しかし、今現在、まだ核兵器を保有している国が 9 カ国あります。それは、今後、核兵器が落とされるかもしれない。ということなのです。私は、核兵器のない平和な世界をつくるため、核兵器の悲惨さ、平和の大切さを、人々に伝えていきます。

怒りの広島

上板橋第二中学校　２年　髙城　愛菜

「平和」には色々な考え方があると思います。でも、いざ「平和とは何ですか？」と言われてもすぐに答えることは難しいのです。なぜなら、今、本当に平和であると言い切ることはできないから。現在も核兵器は存在し、戦争をしているところもあるからです。

【被爆橋梁】

私は、広島平和公園の近くにある被爆橋を７２年前のあの日を思い浮かべながら渡りました。橋の下の川には水を求めてたくさんの人が来て、橋は死体だらけで、生きている人も動けなく、水を求めていた。この想像に耐え切れなくなり、橋を渡っている途中で考えるのを止めてしまいました。想像するだけでも心を痛めるのに、７２年前のあの日を実際に見たら・・・とても胸が苦しくなりました。

【被爆体験講話を聞いて】

被爆体験について話して下さった川本さんは、当時１２歳で、５０㎞離れた場所に学童疎開をしていました。

川本さんのお話の中で一番衝撃を受けたのは、孤児になった人がたくさんいたと言うことです。孤児になった人の唯一の食べ物は新聞で、水と一緒に流し込み、やがて死んでいきました。約 2000～6000 人の方が亡くなり、約 6000 人の方が行方不明となりました。孤児になった人が生きていくには、ヤクザの仲間に入るしかなかったそうです。私は、被爆しなかった人で、亡くなった方や行方不明になった方が、こんなにもたくさんいたことを初めて知り、一体どれだけの人がこの事実を知っているのだろう、と思いました。

お話の中で、「爆弾では死ななかったけど、孤児になって亡くなった人がたくさんいたことをわかっていてほしい。」「食べることのありがたさ。学べることのありがたさ。」「判断するのは自分。その判断が出来るようになるためには勉強すること。」この３つの言葉を私は伝えていきたい、と強く思いました。

戦争をつくることが出来るのなら、平和をつくることもできるはず。なぜならどちらも人間がつくることだから。でも、平和をつくるには、お互いの意見を共有し、分かり合う必要があるのです。

私たちが、戦争、核兵器の恐ろしさ、平和への意識を伝えなくてはいけないことが、広島平和の旅を通してよく分かりました。

「怒りの広島」。それは、「心の奥底には怒りの心があるけれど、今は、平和を求める心へと変わっている。」そう感じました。

広島が教えてくれた平和

上板橋第三中学校　２年　尾嵜　夏帆

８月６日午前８時 15 分。真夏の太陽が生い茂る緑を眩しく照らす、現代を生きる私たちにとってはなんてことない夏休みの中の１日に過ぎないこの日。72 年前のこの日の広島も、戦時中という環境ではあっても何の変哲もない朝を迎え、それぞれが希望を持っていました。広島には、鮮やかな緑が、人々の笑顔が、たくさんありました。でもこの日は、一瞬で悲劇となってしまったのです。たった一つの爆弾が、14 万人の命を奪いました。たくさんの人が全身に火傷を負い、放射能による病気を患い苦しみました。家族や友人を失い、差別を受け、多くの人が心に深い傷を負いました。

今回の平和の旅で、原爆ドームや平和記念資料館を見学したり、平和記念式典や灯篭流しに参加したりして、本やインターネットだけではわからなかった戦争の実態を自分の目で確かめ、本当にやるせない気持ちでいっぱいでした。

中でも、被爆体験を語ってくださった川本さんのお話は私の心に深く刻まれ、とても感銘を受けました。家族を失ってしまった孤児は、飢えと寒さで 6000 人が亡くなったそうです。「学校に行けず、学歴が無いから就職できない。原爆の放射能を浴びたから結婚させてもらえない。親もいない。誰も助けてくれない。行き場をなくし、何のために生きているのかわからなくなった。死にたいと思った。それでも、あったことはあったことだとみとめなければならない。確かにアメリカは憎い。でもいつまでも憎んでいたら平和は実現しません。大事なのはこれからです。私はこれからの日本、世界がどうなるのか楽しみ。」と話してくださいました。「無条件に仲良くしてくれる友達を大切に。勉強ができることと食べることができることに感謝する。これからの社会はあなたたちが作る。」川本さんの力強いメッセージに、戦争の悲惨さをこれからの人々に伝えるという使命感を感じました。

原爆の被害を受けた広島は、もう 70 年は人が住めないと言われてきました。しかし広島は、たくさんの草花が生え、外国人観光客まで多く訪れる明るい街になりました。原爆が投下されたことで多くの憎しみを生み出し、色々なものを奪いましたが、人々に戦争の恐ろしさや平和の尊さを教えてくれたのだと思います。残酷な戦争を乗り越えてきたからこそ、今の平和な日本があります。今の日本は、食べることも遊ぶことも勉強することも当たり前にできます。それがいかに幸せでありがたいことなのかこの旅を通じて知ることができました。

もう 2 度とあの日を繰り返さないために、戦争で奪われた数えきれない程の命を無駄にしないためにも、私は伝えていきます。戦争の恐ろしさを。平和の尊さを。一人ひとりが戦争と平和について知る。人それぞれに正義があって意見や主張が違っても、互いに認め合う。身近なところから実践して、それが世界に繋がっていく日が、争わずに助け合う世界が、核兵器がなくなる日がいつか必ず実現すると信じています。

本当の平和とは

桜川中学校　２年　石川　七海

～はじめに～

私は、今回の旅で「平和とは何か、どうすれば平和に近づくのか。」という課題をたて、広島に行きました。読んでいる皆さんもこのことについて考えてみて下さい。

～平和記念資料館～

平和記念資料館では、原子爆弾がもたらす人体への被害や投下されたときの状況などがわかりやすく説明されていました。

「人影の石」、平和記念資料館の中で、最も衝撃を受けた写真の題名です。この写真は、階段に腰をかけていた人が原爆の閃光を受けて大火傷を負い、その場で死亡したものと思われます。強烈な熱線により、腰掛けていた所が影の様に黒く残りました。

私は、この写真から人がつい 1 秒前にいたことさえ消してしまうほどの原子爆弾の威力に恐ろしさを学びました。

～被爆体験講話会～

この講話会は私にとって一番心に残り、勉強になりました。特に、驚いたことは、食べるものがなかった終戦後に新聞紙を水と一緒に飲み込んでいたことです。私は、このことから食べ物があること、食べることができるありがたさを実感しました。

被爆者の方は当時の各国の指導者は「自分たちが正しいと信じきっていて、話し合いができず、ついには原爆まで落とされてしまった。」と言っていました。これは、アメリカと日本の指導者がお互いの話しに耳を傾けることが出来なかった事を表しています。このことから、考え方の違いを武力で終わらせるのではなく、冷静に話し合うことがどんなに大切かがよくわかりました。

～本当の平和とは～

私は、今回の旅で課題の答えが出ました。まず、私が思う平和は「核兵器が無く、正義の指導者がいる世界」です。そして、その平和に近づくために出来ることは「核兵器の恐ろしさや廃絶を訴え続け、指導者を選ぶこと」だと思います。

被爆者の方達の平均年齢が 80 歳を超えています。いつか、その声を二度と聞くことができなくなります。次は私達がその意志を引き継ぎたくさんの人々に伝える番です。
世界中の人たちが幸せになるために。おなじ過ちを繰り返さないために。

人影の石

原爆ドーム

皮膚がんを発症

広島平和の旅に参加して

向原中学校　２年　伊東　陽希

＜参加の目的＞

僕は「広島平和の旅」に参加して貴重な経験をする事が出来ました。班の仲間と話し合い、考えを深め合って、とても充実した時間を過ごせました。

＜平和記念資料館を訪問して＞

当時原爆が落とされた際に、被害を受けた物が展示されています。その中でも心に残っているのは、【8 時 15 分に止まった時計】です。1945 年午前 8 時 15 分に一瞬のうちに 14 万人もの尊い命が亡くなってしまった事に、原爆の恐ろしさを実感しました。そして、その時計が傷だらけで動かなくなってしまっても、後世の人に「戦争は二度とやってはいけない」という意思を次の世代に語りかけているように感じました。

＜平和記念式典に参加して＞

とても暑い中式典が行われ多くの方々が参列されました。しかし、原子爆弾が投下された当時はこれ以上の暑さだったと思うと胸がいっぱいになりました。その中でこども代表のあいさつの、「平和を考える場所、広島。平和を誓う場所、広島。未来を考えるスタートの場所、広島。」には、世界で初めて原爆が落とされたからこそ二度と起こしてはならないと思う平和の意味が込められていると思います。

＜被爆者のお話を聞いて＞

川本さんは当時小学生の時に被爆しました。原爆が投下された時は施設に居たので助かったそうです。しかし、両親は爆心地の近くに居たので亡くなってしまいました。両親を失う辛さは想像しただけで心が痛くなります。川本さんは、僕達に力強くこう言って下さいました。「平和とは、差別を無くす。自分達から差別、いじめをなくして欲しい。」と。僕には友達、親に伝えていく使命があると思いました。

＜まとめ＞

僕は、広島平和の旅に参加して「原爆がもたらす被害、平和の尊さ」を改めて知りました。僕達に出来ることは小さなことですが色々な人に話して平和の大切さを後世に伝えたいです。

最後になりましたが、貴重な体験を与えてくださった広島の関係者の方々をはじめ、同行してくださった先生方、板橋区役所の方々、ありがとうございました。

今を生きる幸せ

赤塚第一中学校　２年　中庭　くるみ

私は、今回の広島平和の旅で普段学校の授業では学べない事を多く学ぶことができました。私にとってこの三日間は、平和について深く考えるきっかけになりました。

【ピースクラブ開催事業に参加して】

地元の方が主催されている、‘戦争を知らない世代’に平和を伝えるという学習会に参加しました。

これに参加して、一番印象に残ったのは、原爆が投下されたそのとき偶然にも建物の地下室にいたことにより奇跡的に助かった人の話です。その人が地下室から上に上がると辺り一面火の海になっていたそうです。その人は、本来なら助かったことを喜ぶところを「なぜ…自分だけ生き残ってしまったのか」と後悔したそうです。

これを聞いて、「生きていること＝後悔」と捉えることしかできなかったと思うと、心が重くなり、そして今「生きていること＝幸せ」と思えることがどれだけありがたい事なのか、ということを改めて考えさせられました。

【被爆体験講話にて】

当時爆心地から離れたところに疎開していた川本さんに話を聞かせて頂きました。たくさんの貴重な話を聞いた中でも、一番印象に残ったことは、川本さんが被爆体験を伝える活動をしなければと思った時、友人と交わされた会話の内容です。

川本さんは、長いこと広島を離れていました。そんなある日、昔の友人から連絡があり、広島に戻ってきた川本さんは無残な焼け野原だった町が美しく蘇り驚いたそうです。しかし、それと同時に「これでは、原爆の悲惨さを忘れてしまう」と思ったそうです。そのことを友人に話すと、泣きながら「家族もいる。やっと手に入れた幸せだから、過去の事は話さないでくれ。」と言われたそうです。原爆投下により、後遺症があるからなどの理由で結婚も難しかった中でも精一杯生き、手に入れた幸せ。今では、当たり前に感じる幸せも当時の人からすれば、光り輝く宝石のようなものだったのかもしれません。今笑顔で過ごしているということは、なによりもの幸せなのかもしれないと思います。

原爆を投下したことは、人々の笑顔を奪い去っていきました。それでも懸命に生きることで、新たな幸せを手に入れられるのだと思いました。被爆した方々が思っていることは、一つです。〝伝えていって欲しい〟これが、今を生きる我々の使命だと思います。

広島を忘れないために

赤塚第二中学校　２年　大久保　聡美

8 月 6 日午前 8 時 15 分。きのこ雲の下で、何が起こったのかを、私たちはこの目で見てきました。

平和記念資料館

ここにはたくさんの写真や、資料が展示されていました。どれも本当に起こった出来事で、残酷なものもたくさんありました。しかし、この現実から目をそむけてはいけないという思いで見ました。この資料館を見た人が、少しでも平和や原爆の被害について、考えてほしいと思いました。

平和記念式典

記念式典当日の朝は、とても暑く、よく晴れていました。72 年前のあの日も、よく晴れていたそうなので、被爆者の方は、この天気のことをどう思っているのだろうかと思いました。式典で広島県こども代表の方が言っていた、ある言葉が私の胸に残りました。「苦しい中、必死で生きてきた人々がいなければ、今の広島はありません。」

あの日、どんなに苦しい事があっても、諦めず、前を向き続けて生きてきた人たちのおかげで、今私たちは生きているという強い気持ちになりました。

被爆体験講話会

私たちは小学 6 年生のときに被爆された川本さんから、お話しを聞くことができました。川本さんは、平和とは何かという問いに対して、「差別のない世界、偽りのない世界、お互いが自由に話し合える世界」と言っていました。私はその言葉を聞いて、自分たちは平和をつくるために何が出来るのかと考えました。学校という小さな社会の中でも、いじめなどのつらいニュースは絶えません。まずは、そういう身近にある事から解決していくことが平和への第一歩だと思いました。

最後に

この平和の旅に参加して、私は広島の強さを学びました。70 年間は草木も生えないだろうと言われた場所には、今多くの人が、笑顔で暮らしています。元の生活に戻すには、大変な苦労があったと思います。その苦しみを乗り越えたからこそ、広島は強く美しい場所になったのだと思いました。この平和の旅で学んだ平和の大切さや命の尊さをより多くの人に知って考えてもらいたいです。貴重な体験をさせて頂き、ありがとうございました。

核なき平和な世界へ

赤塚第三中学校　２年　山岸　洋太

1945 年８月６日。
一発の原子爆弾が、多くの罪なき人たちを地獄へと突き落としました。
あの朝何が起きたのか、今回の広島平和の旅を通して深く学ぶことができました。

平和記念資料館見学

一日目　中・高校生ピースクラブの方に原爆やその建造物、記念碑についての説明を聞いた後、資料館を見学しました。私が最も心を打たれたものは右の「８時１５分で止まった時計」です。この展示は広島が地獄と化した瞬間をいつまでも指しています。そう思うと心が痛くなりました。

平和を誓う行事

二日目　「あの日」から７２年が経ちました。
平和記念式典や灯篭流しがあり、参加をしました。式典会場に行くとまず驚いたのが外国人の方の人数です。後で調べてみると参列国は８１か国だそうです。各国で原爆への関心が高いのだと感じました。
これからも、もっとたくさんの方々に当時の状況を知ってもらい、核兵器廃絶へ一歩一歩踏み出していってほしいと思いました。

被爆体験講話会

三日目　被爆者 川本さんのお話を聞くことができました。
当時小学６年生だった川本さんは疎開していて助かったのですが、広島の街に戻ると家族の姿はなく、辛うじて生き残った姉もその後原爆の被害による白血病という病気で亡くなったそうです。そんな辛い経験をしていながらも「いつまでも過去の事を言っていても仕方ない。」と未来の平和に向けて前向きに話す姿が力強く、大変印象に残りました。

私達の使命

こうした平和への運動を行っている中、未だに核兵器を保有している国があるのが現状です。核を完全になくすことは難しいですが、今回学んだ事を発表会などを通じて一人でも多くの人に知ってもらう。そして、核兵器のない平和な世界をいつまでも願い続ける事が私達の使命だと考えます。

平和の実現

高島第一中学校　２年　馬場　悠人

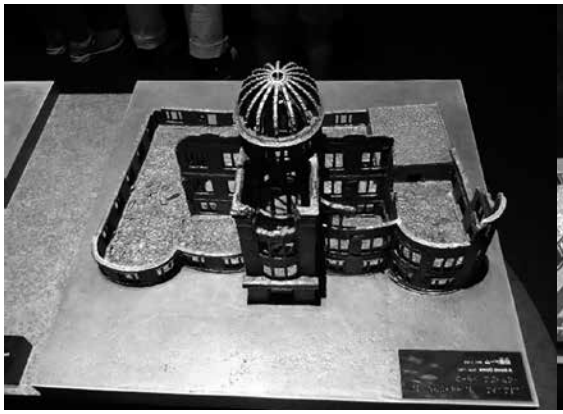
皆さんは平和について考えたことはありますか。私は今まで平和という問題について正面から向き合っていませんでした。世界にはまだ、戦争や飢餓、貧困、差別などがあり、「これらを全て解決するのは不可能だ、平和なんてとても実現できない。」と考えていたからです。しかし、この旅を経験してその考えは変わりました。

１日目は、平和記念資料館へ行きました。そこには、思わず目をそらしてしまうほど痛々しい資料が数多く展示されていました。８時１５分で止まったままの時計、真っ黒になっているまだ食べられていないお弁当、焼け焦げた三輪車。実物で見ていると、原子爆弾で苦しんだ方たちの叫び声が聴こえてきそうなほど迫力がありました。

２日目は、平和記念式典に参列しました。広島市長をはじめとし、内閣総理大臣や国際連合事務総長なども参列されており、７２年経った今でも平和について真剣に取り組んでいる姿勢、思いを感じることができました。また、１分間の黙祷では７２年前の今、この瞬間に原子爆弾が落とされ、広島が焼け野原になった時の爆風、衝撃、熱を想像して心がしめつけられたような感覚になりました。私は改めて、原爆が使われることがないように強く願いました。

３日目は、被爆体験講話会に参加しました。語り部である川本さんは今年８３歳になられますが、あの日はまだ１１歳の小学生でした。その話の中でも２０００人近い子どもが、終戦しても引き取られなかったという話はとても恐ろしかったです。新聞紙をも食べ物とするほど飢えており、家すらない生活を続け、大人になっても就職も結婚もできなかったそうです。やはり原子爆弾は肉体的にも精神的にも大きな傷を与える残酷な兵器だと再認識しました。

この３日間、私たちは仲間と共に新たな知識を発見、吸収してきました。確かに、現在は平和と呼ぶには程遠いかもしれません。しかし、１人でも多くの人が伝え、行動し続けることで、平和へと歩を進めていくことができるのではないでしょうか。



広島平和の旅に参加して感じたこと

高島第二中学校　２年　波多江　南月

「被爆ややけどで苦しんだ人がたくさんいた」というのが、今までの原爆投下に対しての私の認識でした。しかし、平和の旅３日目の被爆者講話会で川本省三さんは「戦争孤児」についてこうおっしゃいました。「平和資料館には 2000～6000 人の孤児が行方不明と書いてあるだけなので、どれだけ辛かったかを知ってほしい。そのために語り部を始めた」と。

８月６日の朝、原子爆弾が広島の町に落とされ、一瞬にして何もかもが失われました。当時、学童疎開をしていた子供たちは助かりましたが、広島市内に残っていた家族はほとんど亡くなってしまいました。引き取られた子供もいましたが、ほとんどは路上生活をしなければいけなくなり「戦争孤児」になりました。川本さんもその１人でした。わずかにあった炊き出しは次第になくなり、そのような中で孤児たちが唯一食べることができたもの。それはたった１枚の新聞紙でした。朝、サラリーマンが読んで捨てた新聞紙は、孤児たちの食料になりました。私は、それを聞いて鳥肌がたちました。食べ物ではないとわかっているのに食べないと生きられないという状況に、このような判断をせざるを得なかったことに、恐怖を感じました。そして、被爆ややけどをしていなくても、生きることが大変だった子供たちが大勢いたんだと気付かされました。そして、大人になってもずっと背負い続けなければいけない「保証人の親がいない・学歴がない・被爆していて結婚ができない」という事実を知りました。

川本さんは、原爆を落としたアメリカについて、こうおっしゃっていました。「憎いけれど、それをずっと言っていたら平和にならない。でも、事実を伝える必要がある。過去にあったことをいつまでも言っていては何も変わらない」と。広島の人は、とても強く、優しいと思いました。自分の体験を話すことは、容易ではないはずです。過去の記憶と戦いながら、苦しみながらも私たちに伝えようとしてくれているのです。そのような思いを無駄にしてはいけません。

いつか、戦争を体験した方たちが世界からいなくなってしまうときが必ず来ます。その人たちの代わりに、思いを、事実を伝えていくのは誰でしょうか。それは、今を生きる私たちです。そして次の世代へ「繋げて」いくのです。知ることができたのに伝えていかないのは「見て見ぬふり」をしているのと同じです。今住んでいる日本に実際に起きたことなのだと、少しでも多くの人に、少しでも広い世界へ、繋げていかなければならないのです。この３日間で、本やインターネットでは知ることのできない戦争の悲惨さ、平和の尊さを知ることができました。そして、自分のやるべきことを再確認できた旅となりました。

平和への思い受け継いで

高島第三中学校　２年　市東　美紗

「これが、原爆ドームなんだ…。」私は広島に来たことを実感しました。そして、ここに原爆が落とされたことも。こうして、私の平和の旅が始まりました。

資料館は想像を絶する展示ばかりで１つ１つに心を打たれました。特に多く展示されていたのは8時１５分で止まった時計です。それぞれの時計は別々の場所で誰かが使っていたはずなのに、全てが同じ時間で止まっていました。その時計を見るたびにその人の人生はそこで閉ざされ全てが止まってしまったんだ、もう動かないんだ、と命の重みを感じました。また学生服や三輪車も本で見た物とは違い、魂が残っているのか「生きたかった。」と言っているようでした。中には目を背けたくなるような写真もたくさんありました。原爆のやけどの写真などは男女の見分けもつかず年齢も分からず、人ではないかのようになっていて、まさに地獄でした。今を生きている私達は資料館から出れば今の広島に戻れるけれど、実際に被爆した人たちは住んでいた町、友達や家族もひどい姿になり助けたくても助けられない、そんな中にいてどこへ逃げても辛かったんだと思うと胸がいっぱいになりました。

私達は語り部の川本さんにお話を伺いました。川本さんは疎開していて被爆しませんでしたが、家も家族も失い孤児になりました。当初は盗みやけんかをして生きていくしかなかった過去を話したくありませんでしたが、「二度と同じことが起きないように」と願って話をしてくださっています。被爆していなくても辛い思いをしている人がたくさんいることを私も初めて知りました。そして「もっと勉強したかった。遊びたかった。と思いながら亡くなっていった人のことを忘れないで」という言葉を聞いて、好きなことを学び、おいしい物をいっぱい食べられることがどれだけ大事なことかを実感しました。そのことを忘れずに感謝の気持ちを持って生きていきます。

平和の旅を通じて私がこれからやるべきだと思った事は、一人でも多くの人に戦争の悲惨さを伝えて、皆でなぜ戦争がいけないのかを考え、平和な世界をつくっていくことです。川本さんは過去を責め合うのではなく事実は認め、これからどうするかが大事だと仰っていました。川本さんの話はとても貴重で本当の戦争、平和への願いを知ることができました。これからは身近な人などにも戦争の話を聞きたいです。そしてみんなが願う平和な世界へ一歩でも近づけるように精一杯学び、今できること全てを大切にしていきたいです。

第２部

第７回　中学生長崎平和の旅

平和祈念像前にて

参加生徒

板橋第一中学校	宇山　颯人	志村第四中学校	後藤　悠名	向原中学校	大谷　千鶴
板橋第二中学校	葛岡えりか	志村第五中学校	藤　由莉奈	赤塚第一中学校	丸山　莉加
板橋第三中学校	松村　咲喜	西台中学校	内藤　優葉	赤塚第二中学校	川邉優里奈
板橋第五中学校	齊藤　大	中台中学校	佐藤　彩愛	赤塚第三中学校	西嶋　千里
加賀中学校	吉田　慧	上板橋第一中学校	常盤　侑那	高島第一中学校	流石　風香
志村第一中学校	小山陽菜美	上板橋第二中学校	槇野　壮倖	高島第二中学校	針金　秀明
志村第二中学校	宮田　有彩	上板橋第三中学校	満留　未森	高島第三中学校	深田　萌
志村第三中学校	新塚　小牧	桜川中学校	大見　恋己		

引率者

高島第一中学校　岡村　克也校長（団長）　榎本　直輝教諭（指導員）　熊谷　雅子教諭（指導員）

中学生長崎平和の旅　行程表

実施期間　平成２９年８月８日～１０日（２泊３日）

８月８日（火）

時　間	行動内容
7:15	板橋区役所集合・出発式
7:30	板橋区役所　発
8:50	羽田空港　着
10:00	羽田空港　発
12:00	長崎空港　発（観光バスで平和公園へ）
13:00	平和公園　着
13:40	★青少年ピースフォーラム受付
14:00～17:00	★開会行事（被爆体験講話） ★被爆建造物等のフィールドワーク（浦上天主堂コース）
17:10	平和公園　発
18:00	ホテル　着
19:30	夕食
22:00	就寝

８月９日（水）

時　間	行動内容
6:00	起床
7:00	朝食
8:00	ホテル　発
9:00	平和公園　着
10:40～11:45	平和祈念式典参列
12:00	昼食
13:00～16:15	観光
17:00	ホテル　着
18：00～19:55	学習会
20:00	夕食
22:00	就寝

８月１０日（木）

時　間	行動内容
6:00	起床
7:00	朝食
8:20	ホテル　発
9:10	原爆落下中心地　着（献花）
9:30～11:00	長崎原爆資料館・追悼平和祈念館見学
11:10	原爆資料館発
12:00	昼食
13:00	長崎空港　着
13:55	長崎空港　発
15:40	羽田空港　着
16:20	羽田空港　発
17:45	板橋区役所　着・解散式

★は青少年ピースフォーラム事業（長崎市主催）

平和の原点は人間の痛みがわかる心を持つことです

第７回中学生長崎平和の旅
団　長　　岡　村　克　也
（高島第一中学校長）

板橋区は昭和 60 年（1985 年）1 月 1 日に『板橋区平和都市宣言』をしており、中学生広島平和の旅は今年で第 23 回に、中学生長崎平和の旅も第 7 回となりました。

板橋区が自治体として、中学生をそれぞれの平和祈念式典に派遣していることは、広島・長崎の惨禍を絶対繰り返してはならないことを強く全世界の人に訴え、世界平和実現のために　積極的に役割を果たすという『願い』そのものです。

今年 7 月には、ニューヨークの国連本部で 122 ヶ国が賛成して、核兵器禁止条約が採択されました。核兵器の開発、保有、使用、威嚇などを全面的に禁止する条約です。しかし、現実には、核保有国と非保有国があり、核の傘に頼る国もあって、日本は条約には署名せず、実効性には大きな課題があります。

私たちは、8 月 9 日の長崎平和祈念式典に参列させていただくとともに、8 月 8 日には長崎市主催の青少年ピースフォーラムに参加し、当時 14 歳で被爆された深堀譲治さんの辛く悲しい・また壮絶な体験談を聴いてきました。

戦争は人々の命や財産・それまで築き上げてきた文化や歴史などのすべてを奪うだけでなく、人間のひととしての感情をも奪い去っていくものだということを、改めて認識することができました。

「平和の原点は人間の痛みがわかる心を持つことです。」これは、深堀譲治さんの名刺に書かれている言葉です。この言葉をしっかりと次代につなげていきたいと思います。

8 月 9 日は平和公園での長崎平和祈念式典が行われるだけでなく、長崎市内各所・全ての小中学校等で鎮魂と慰霊の行事が開催されています。

田上長崎市長は長崎平和宣言の中で、「遠い原子雲の上からの視点ではなく、原子雲の下で何が起きたのか、原爆が人間の尊厳をどれほど残酷に踏みにじったのか、あなたの目で見て、耳で聴いて、心で感じてください。もし自分の家族がそこにいたら、と考えてみてください。」と、世界各国のリーダーに呼びかけました。

また、「戦争体験者や被爆者からの平和のバトンを途切れさせることなく未来へつないでいきましょう。小さな町の平和を願う思いも、力を合わせれば、そしてあきらめなければ、世界を動かす力になるのです。」との発言もありました。

今回、第 7 回中学生長崎平和の旅に参加した各中学校 23 名の代表は、改めて強く世界中の恒久平和の実現と核兵器廃絶のために、自分は何ができるか、またみんなは何をしなければいけないかを考えてきました。平和のバトンを確実に未来につなぐために、23 名の代表が果たす役割はとても重要です。今後とも各中学校でのキーマンとしての活躍、未来への活動の継続を心より期待しています。

平和を未来へ

板橋第一中学校　２年　宇山　颯人

僕は、被爆地長崎を訪れて、改めて平和の尊さや戦争の恐ろしさ、原爆の被爆者の想いを知ることが出来ました。

被爆体験を語ってくださった深堀譲治さんは、１４歳のときに原爆の投下により母親と弟２人と妹の４人を亡くしました。当時、深堀さんは学校にいたので助かりました。しかし、家にいた母親は黒こげになり亡くなり、遊びに行っていた、一人の弟の姿はなかったそうです。もう一人の弟と妹は生きていましたが、数日後に亡くなりました。弟は「兄ちゃん、死ぬなよ。」と最後の言葉を告げて亡くなっていったそうです。僕は、その後の話を聞いて涙が出そうになりました。たった一発の原子爆弾が街を破壊し、関係ない人も巻き込んでいくのは許せないと思います。

現在、原爆の影響により亡くなった人の数は、１７万５千７４３人と言われています。昨年より３千５１３人増えました。このことから、今も尚、原爆症により苦しんでいる人がたくさんいます。亡くなった方々には心からご冥福をお祈りします。

平和記念式典には、多くの人が参列していました。中には、外国の方も多く参列していました。田上長崎市長や被爆者代表の深堀好敏さん。そして、来賓として安倍首相を含め諸外国の首脳の方たちも参列されていました。田上市長の話の中に、「戦争体験者や被爆者からの平和のバトンを途切れさせることなく未来へつないでいきましょう。」という言葉がありました。僕は、その言葉が胸に刺さりました。また、語り手の方は、僕たちの未来を守るために辛く悲しい体験を話してくださいました。その語りつがれた平和のバトンを次の世代につないでいこうと思いました。

この平和の旅を終えて、僕は、改めて気付いたことがあります。それは、もう絶対に核兵器を使ってはいけないということです。核兵器で戦争を終わらせてはいけないと思います。ましてや、実験のために核兵器を使うなんて、本当に許せないと思います。僕は被爆者の一員ではありませんが、その被爆者の一員になったつもりで被爆者の人たちと日本国内、世界中の人たちに「戦争はしてはいけない。核兵器は使ってはいけない。」と訴えかけたいです。そして、この先の世代の戦争を知らない人たちにも伝えていきたいです。そして最後に、核兵器がなく戦争がない恒久平和の実現に向けて、みんなで取り組んでいきたいと思います。

平和の旅に参加することが出来て本当に良かったです。このような旅をさせていただいた板橋区や長崎の方々に感謝したいと思います。

核の無い世界へ

板橋第二中学校　２年　葛岡　えりか

私は、原爆の悲劇や被害を学び、後世にも原爆による被害を伝えていきたいと思い長崎平和の旅に参加しました。

被爆者体験講話

被爆者体験講話では当時１４歳で被爆した深堀譲治さんのお話を伺いました。深堀さんは原爆で母と中学１年生、小学５年生の弟２人と５歳の妹を亡くしました。被爆した時、深堀さんと当時中学１年生だった弟は助かりましたが、弟は頭部の怪我が悪化し亡くなりました。深堀さんは「核は絶対に許してはいけないという心で生活して欲しい。」と訴えておられました。私自身も平和に関する活動に参加し、被爆者体験講話で伺った話を世界に伝えていきたいです。

フィールドワーク

ピースボランティアの方の説明を聞きながら、被爆建造物を見学しました。原爆の影響で町は崩壊し、多くの方が亡くなられたと聞きました。被爆前の写真と被爆後の写真が驚く程に違っていて、原爆の威力を物語っていました。長崎は被爆建造物が多くは残っていないので、今残っている被爆建造物を大切にし、被爆者のいない後世にまで平和の尊さや原爆の威力を伝えて欲しいと思いました。

平和祈念式典

式典は重々しい雰囲気の中、被爆者歌う会「ひまわり」の方々の合唱によって始まりました。歌には平和への強い想いが感じられ、聞いているだけで涙が出てきました。長崎平和宣言では長崎市長が「被爆者がいる時代」の終わりが近づいていると仰っていて、私はこの言葉が心に深く残っています。世界には核兵器が約 15,000 発あります。被爆者がいなくなった時、被爆していない私達が世界に平和の大切さを訴え、伝えていく事が出来るのか、今から平和について考え伝え続ける事が日本人の使命だと私は思います。

長崎平和の旅を終えて

私は平和の旅に参加して得たものが沢山あります。長崎に行った後に板橋の平和祈念像を見に行くことで今まで理解していなかった部分を理解する事ができました。平和とは何かや、平和の尊さという大切な事を学びました。平和の旅では被爆者の方のお話を聞くなどの多くの貴重な体験が出来ました。この体験は将来にも生かしていくことが出来ると思います。世界から核が無くなるように、長崎平和の旅で学んだ事を世界に向けて発信していきたいです。

命の尊さ

板橋第三中学校　２年　松村　咲喜

1945 年（昭和 20 年）8 月 9 日午前 11 時 2 分、長崎市に原爆が投下された。アメリカ合衆国連邦政府は長崎市に投下された原子爆弾のコードネームを「ファットマン」と名付けていた。

１　被爆者の方による講話で学んだこと

被爆者の深堀さんが体験したことは、想像していたよりもはるかに過酷で恐ろしいものだった。原爆が落ちた時に深堀さんは家族と別の場所にいた。母を見つけたときは母の肌は焼けただれていて、深堀さんは涙も出なかったそうだ。弟は生き延びたにも関わらず後に体に斑点ができ始めて「兄ちゃん死ぬなよ。」と言い、深堀さんを残して亡くなった。せっかく生き残ったのに、医者にも対処のしようがないといわれ、最終的には亡くなった。そのような人が他にもたくさんいたという。

原爆が落ちた時の死者は約 7 万 4000 人、負傷者は約 7 万 5000 人と言われた。しかし、その数字はとても不確実なもので実際にはもっと多くの人が亡くなっており、現在でも放射線の後遺症で苦しんでいる人々がいる。

私はこの話を聞いて、一つ一つの命が尊いものなのに一度にこんなにも多くの人の命が奪われることは残酷すぎると感じた。

２　原爆資料館を見学して

原爆資料館では熱線、爆風、放射線による症状などを学んだ。長崎市は周りが山で囲まれた特徴ある地形であったため、熱線や爆風が山によって遮断された結果、広島よりも被害は軽減されたが、周りが平坦な土地であった場合の被害想定は広島に落とされた「リトルボーイ」の威力を超えたといわれている。

強烈な熱線を浴びた人は重いやけどを負い、爆心地から約 1.2 キロメートル以内で遮るものがないまま熱線を浴びた人は、皮膚が焼き尽くされ、内臓などにまで障害を受けてほとんどが即死か数日のうちに亡くなった。

爆風による被害としては、人々が吹き飛ばされ、散弾のような無数のガラスや木片を全身に浴びた。

放射線による被害としては、人体を刺し貫き、その時様々な細胞を破壊する。爆心地から１キロメートル以内で被爆した人の内、無傷であってもその大多数の人が死亡している。

３　今できること

現在でも世界には、核兵器を保有している国がたくさんある。今回の平和の旅を通して、一番学んだことは、広島、長崎を最後の被爆地とし、もう二度と世界に核兵器を使用させてはならないことだ。このことを今後忘れずに次の世代に伝えていくことが大切だと思う。

原爆が奪うもの

板橋第五中学校　２年　齊藤　大

私は、長崎平和の旅に参加して、現地に行くことでしか学ぶことができないことを、しっかりと自分の目で見て、耳で聴き、手で触れることで想像を絶する原爆の威力や、悲惨さを学んでくることができました。そのことを下記３点にまとめました。

1.被爆者体験講話

私は１日目の青少年ピースフォーラムで深堀譲治さんの講話を聴きました。深堀さんは14歳で被爆し、母と中学１年生、小学５年の弟２人、そして５歳の妹４人が、爆心地から約600mのところで被爆し亡くなったそうです。深堀さんはその場の温度、におい、空気感は実際に体験した人でないと分からないとおっしゃっていました。

原爆が落とされた瞬間、全体に風速 440m/s もの熱風が来て、家も、学校も、工場も、何もかもが灰になり空は真っ赤になったとおっしゃっていて、自分の家に戻ったところ家は灰になって、真っ黒になり下半身がなくなっている状態のお母さんを見つけて、深堀さんは涙も出なかったそうです。このお話を聴いて、私は原爆とは街や、命だけでなく心までも灰にしてしまうと思いました。

2.被爆建造物等フィールドワーク

青少年ピースフォーラムで講話を聴いた後、原爆によって被害を受けた建造物等を見学してきました。特に印象に残ったのは、鐘楼ドームと原爆投下当時の地層です。

鐘楼ドームというのは浦上天主堂というキリスト教の教会のてっぺん(約高さ 26m)にあったアンジェラスの鐘というものが川まで転げ落ちてきたものです。

原爆投下当時の地層には、茶碗や溶けた瓶などが埋もれていて、赤くなっている部分は人骨が埋まっています。どちらとも原爆がどれだけ強い力を持っているのかを物語っていました。

3.長崎原爆資料館

３日目の原爆資料館では原子爆弾の実寸大のレプリカが展示されていたり、原爆が投下されて生き残っても火傷でケロイドなどが残り差別され自殺したりする人もいたりして、やはり原爆は命だけでなく、心までも奪ってしまうこと改めて感じました。

最後にこの悲惨な出来事をこれから起こさないためにも、みなさんがこの感想文集を読んで、現代の核爆弾保有禁止と及び発射の防止が、いかに大切なのかをみなさんも一人でも多くの人に伝えることが大切だと思いました。

ナガサキで学ぶ

加賀中学校　２年　吉田　慧

【1 日目】私たちは、青少年ピースフォーラムに参加し、被爆当時 14 歳だった深堀譲治さんの被爆体験講話を聞きました。72 年前の 8 月 9 日、深堀さんはいつも通りに工場へ行き仕事をしていました。11 時 2 分。「パーンッ」と大きな音が鳴り、ピンク色の光に全体が染まったといいます。深堀さんのいた工場は爆心地から少し離れたところにあったので助かりましたが、爆心地から約 600mのところにいた母と 2 人の弟、妹は亡くなりました。家族を探しに家に帰ると、すでに亡くなっていた母の姿が見えて、「あっ！」と思い、涙も出なかったそうです。突然家族を亡くした深堀さんの悲しみは想像を絶しました。それほど当時は、私たちが住む平和な世界とはかけ離れた悲惨なものだったのです。「1 日の中で一番幸せな時間はいつですか？」という質問に対し深堀さんは「朝目が覚めて何もなく 1 日 1 日暮らせるのが、平凡だけど幸せ」とおっしゃっていました。それを聞いて私は、平和に暮らせている日々を絶対に大切にしなくてはならない、2 度と戦争をしない日本であり続けなければいけないと強く感じました。

【2 日目】８月９日、平和祈念式典に参加しました。いつもテレビで見ていた式典に参加できたことは、本当に貴重な体験でした。一番心に残ったのは、長崎市長の長崎平和宣言です。田上市長は「最も怖いのは無関心なこと、そして忘れていくことです。戦争体験者や被爆者からの平和のバトンを途切れさせることなく未来へつないでいきましょう。」と述べていました。被爆者の平均年齢は 81 歳を超え、数年後には被爆者はいなくなっているかもしれないというこの時代。必要とされるのは、原爆被害の実相に触れた私たちが次の世代へ、被爆者の方達から受けとった平和のバトンを手に、「戦争を 2 度としてはいけない」ということを語り継いでいくことだと実感しました。

【3 日目】最終日は原爆資料館を見学しました。原爆投下前と投下後の街の写真を見ると、一発の爆弾が一瞬にして街を破壊したことが分かりました。顔に大やけどを負った少年やガラスの破片が刺さっていた服を見て、戦争とはすべてを奪いつくすものだということを学びました。

長崎平和の旅に参加して、私は原爆と戦争の恐ろしさ、平和の尊さを身をもって学びました。戦争はかつての幸せな生活を全て消し去り、悲惨で苦しいものしか残しません。私たちが今回の体験で感じたことをたくさんの人に伝え、核兵器のない平和な世界をつくっていきたいです。

この平和が続くために

志村第一中学校　２年　小山　陽菜美

「兄ちゃん死ぬなよ。」と、弟はそう言って亡くなった。
この言葉は今回の被爆体験講話の中で、私の耳に強く残った言葉だ。
1945 年 8 月 9 日、長崎に一発の原子爆弾が投下された。原爆は、一瞬で長崎のまちを破壊し、人々の命や生活を奪った。

一日目、青少年ピースフォーラムに参加し、被爆体験講話を聞き、フィールドワークを行った。最も関心があった被爆体験講話では、深堀譲治さんという方の話を聞いた。当時 14 歳の深堀さんは、爆心地から離れている所にいたので助かった。しかし、爆心地から 600ｍのところにいた家族を探しに行くと、自分の家の周りで真っ黒に変わり果てたお母さんの姿を見たと語っていた。衣服は何も着ていなく、何かを掴もうとしている様子だったそうだ。弟二人、妹一人も亡くした。もしも自分だったらと考えてみたらあまりに悲しくて心が痛んだ。

二日目は、平和祈念式典に参加した。会場の至る所にたくさんの千羽鶴が飾られ、平和を願う多くの人々が式典に参列していた。被爆者合唱は、もう二度と戦争が起こらないようにと被爆者の熱い思いが歌に込められていた。長崎市長の平和宣言や、被爆者代表深堀好敏さんの平和への誓いの言葉を聞くとたくさんの人が「平和」への強い思いを感じずにはいられなかった。

三日目は、長崎原爆資料館と追悼平和祈念館を見学した。長崎原爆資料館に入り、まず目にとまったものは、午前 11 時 2 分で止まっている時計だった。そしてその後も見学して行くと、熱線による被害で皮膚が焼けただれている人や原爆で亡くなった人たちの遺体が地面に転がっている写真がたくさんあった。一枚一枚写真を見ていくごとに胸が痛くなり、当時の悲惨な惨状は想像を絶するものだった。

最後に、被爆体験講話で深堀さんが「朝、目が覚めて何事もない毎日を過ごす時間が幸せ」と語っていた。私たちが普段生活しているこの何事もない毎日こそが、とても幸せな、かけがえのない日々である事がわかった。今回の長崎平和の旅で学んだことをこれから多くの人に伝えていきたい。戦争は悲しみしか生まない。だからこそ恒久平和が続くように、私たちは戦争の悲惨さや残酷さを次の世代へ受け継いでいかなければならないと強く感じた。

平和の大切さ

志村第二中学校　２年　宮田　有彩

１９４５年８月９日１１時２分、長崎県に原子爆弾が投下されました。私は、長崎平和の旅に参加して、戦争の恐ろしさや平和の尊さを感じました。

〔被爆体験講話〕

被爆体験講話では、当時１４歳で被爆した深堀譲治さんにお話を伺いました。深堀さんの弟は、放射能の被害で亡くなりました。爆心地から１５００ｍまでは、ほとんどの建物が全壊、５００ｍまでは灰しか残らなく死体が転がっていたそうです。深堀さんは、「核を使わないで、地球を平和にしたい」とおっしゃっていました。私は、原爆は想像以上に恐ろしいものだと思いました。また、原爆が落ち、一瞬で多くの人の命が奪われてしまうのは本当に恐ろしく、当時の人々の悲惨さが心に残りました。

〔平和式典に参加して〕

平和式典には、平和を願うたくさんの人が参加していました。被爆者合唱や長崎平和宣言や平和への誓いから、原爆が落とされた悲惨さや、平和を願う気持ちが伝わってきました。特に心に残った言葉は、「長崎を最後の被爆地に」という言葉です。この言葉は、被爆者が訴え続けてきたもので、人類共通の願いであり、意思であることを示しています。私はこの言葉を聞いて、もう二度と原爆が落とされ、被爆する人がいないでほしいと思いました。そして核兵器のない平和な世の中にしていきたいと思いました。

〔長崎原爆資料館〕

長崎原爆資料館では、原爆が落ちた時刻の１１時２分で止まっている時計や、原爆投下の映像、原爆投下後の写真、原爆の被害によって残されたものなどが展示されていました。展示されているものや写真から、想像以上に原爆投下後の様子は残酷で、とても衝撃を受けました。爆風による被害の写真では、全壊している建物がほとんどでした。爆風がどれほど恐ろしいものなのかが分かりました。長崎に原子爆弾が投下された理由なども原爆資料館を通して、詳しく知ることができました。

私は今回の長崎平和の旅で学んだことがたくさんあります。長崎を最後の被爆地にするために、学んだり体験したりして感じた原爆の恐ろしさや平和の尊さを、たくさんの人に伝えていきたいと思います。そして、深堀さんがおっしゃったように、「核を使わないで、地球を平和にしたい」と、私は強く感じました。

世界平和

志村第三中学校　２年　新塚　小牧

１９４５年８月９日１１時２分、長崎に原爆が投下されました。
７２年経った今、私は長崎平和の旅に参加しました。

1日目　　青少年ピースフォーラム

被爆体験講話では、被爆当時１４歳だった深堀譲治さんの体験を聞きました。深堀さんは工場にいて無傷でしたが、自宅にいたお母さんは黒こげになって亡くなりました。２人の弟のうち、１人は行方不明、もう１人は妹と逃げましたが、妹は原っぱで亡くなり、弟は原爆症で亡くなりました。弟は、最期深堀さんに「兄ちゃん、死ぬなよ。」と言って亡くなったそうです。話をしている時、深堀さんは涙を流しながら戦争の残酷さを訴えるように語ってくださいました。

私はこの話を聞き、原爆は苦しみと悲しみを与える恐ろしい兵器だという事が分かりました。

2日目　　平和祈念式典

会場には大勢の遺族の方が参列していました。亡くなった命を悲しんでいる中、市長が「長崎平和宣言」で、「最も恐ろしいのは無関心な事」とおっしゃいました。にも関わらず、私の後方の参列者の中で、他人の様に騒がしく私語をしている人達がいました。

私はこの平和祈念式典に参加した事で、戦争に対しての意識が薄れている人達がいる様に感じました。

3日目　　原爆資料館

館内に入ると、最初に１１時２分で止まった時計が展示されていました。それを見て、この時間に原爆が落ち、たくさんの命が一瞬にしてなくなってしまったのだと思いました。当時の様子が映っている写真はとても恐ろしく、恐怖を感じました。投下された原爆（ファットマン）の模型を見て、たった１つの原子爆弾は数多くの建物や命をなくしてしまうのだと改めて感じました。

［原爆（ﾌｧｯﾄﾏﾝ）の模型］

まとめ

私はこの長崎平和の旅に参加し、被爆地を訪れ、戦争や原爆の恐ろしさを自分の目で見て、聞いて、感じる事ができました。原爆は、「平和」を一瞬で破壊する恐ろしい兵器だという事を学びました。「平和」であるためには、戦争のない世界が必要です。今の日本が、平和な国である事に感謝します。世界が平和であるためには、みんなが戦争や被爆について、もっと知るべきだと思います。戦後７２年が経過したことで、残念ながら戦争に対する意識が薄れ、無関心になりつつある事にも気付きました。だから私は、今回の旅で学んだ事を多くの人に伝えていきたいです。

[板橋区から捧げた折鶴]

戦争の悲惨さを後世に伝えよう

志村第四中学校　２年　後藤　悠名

今から７２年前の８月９日午前１１時２分、長崎に原子爆弾が落とされました。この出来事は、大切な人や、大切なものを人から奪い、人々を恐怖に落とし入れました。戦争や原爆についてはテレビの特番で、夏の時期に見かけるだけでした。あまり、興味もありませんでした。しかし、今回の長崎平和の旅でたくさんの事に気が付きました。一番心に響いたのは平和の尊さです。戦争で起きた大惨事をこれからも伝え続けていく必要があり、微力ながら平和に繋がる事を見つけていきたいと思っています。それは、例えばボランティア活動などです。

＜被爆者体験談話＞

僕は青少年ピースフォーラムに参加し、被爆者である深堀譲治さんのお話を聞かせて頂きました。深堀さんの談話は想像を絶するものでした。１９４５年８月９日の原爆投下当時、深堀さんは工場で働いていたそうです。一方で、ご家族の方は爆心地から６００ｍという場所にいたため、被爆され亡くなったそうです。弟さんが亡くなる前に言った最後の言葉を深堀さんは忘れないそうです。その言葉は、「兄ちゃん、死ぬなよ」深堀さんは、この言葉を忘れたことがないそうです。もう二度と戦争は繰り返してはいけないと強く思いました。

＜平和祈念式典＞

式典の会場にたくさんの千羽鶴を見つけました。多くの人々が平和を願っていることを実感しました。１羽１羽に込められた思いを、今生きている僕たちが色褪せることなく、その事実を後世に伝えないといけないと、そんな役割を担う必要があると思いました。

＜長崎原爆資料館＞

原爆資料館では原爆によって受けた被害の実際を目の当たりにしました。熱風と熱線で溶けてくっついた、６本のガラス瓶。遺体の写真。時間で止まった時計。印象に残るものがたくさんありました。原子爆弾（ファットマン）の模型もありました。被害を受けた実際と、被害を加えたものが同じ場所に展示してあり、複雑な気持ちでした。

＜まとめ＞

現在、被爆者の平均年齢は８１歳を越えました。当時の原爆の被害を伝えられる人も、亡くなったりして少なくなってきました。体験者が減ることは、戦争や原爆の実情を後世に伝えることができなくなります。僕たちに課せられた課題だと思っています。

あの日を最後に

志村第五中学校　２年　藤　由莉奈

１．被爆体験講話

「兄ちゃん死ぬなよ」

これは、当時 14 歳だった深堀譲治さんが弟から聞いた、最後の言葉です。皆さんは想像できますか？母も妹も弟も、すべてを奪ったあの瞬間を。深堀さんは、当時、爆心地からおよそ 3,000m離れた工場で働いていました。「バァン！」という大きな音と共に、最大風速(秒速)が約 300～400mにもなる爆風を受け、工場はなくなってしまいました。譲治さんは機械に隠れていたため無事でしたが、障害物がなかったらどうなっていたかわかりません。家族を探して歩くと、遺体が地面に倒れていたり、水を求める声や、熱い熱いと言っている声が聞こえてきたりしたそうです。想像を絶する光景に、母の遺体を見つけても、涙が出てこなかったそうです。一命をとりとめた人々も、皮膚がただれてしまったり、体に斑点模様ができ、「熱い、熱い」と苦しんだり、ケロイドで差別を受けたりなど、長期にわたってつらい日々が続きました。私が話を聞いた中で最も印象に残っているのは、皮膚がただれてしまった人のことです。寝そべると、全身の血が背中にたまり、血が固まってしまい、身動きが取れません。身動きが取れないため、傷口から体に入ったハエに卵を産みつけられても、うめき苦しむことしかできません。助かった喜びも、あっという間に苦しみにかわってしまう原爆の恐ろしさ、被爆した人々の苦しみが、お話を通してわかりました。

２．平和祈念式典に参加して

被爆者の思いを歌にした「もう二度と」は、３回‘もう二度と作らないで　私たち被爆者を‘という歌詞がでてきます。また、「長崎の鐘」という歌は浦上天主堂の真下にある天主公園の壁に彫られていて、‘なぐさめ　はげまし　長崎の　あゝ　長崎の鐘が鳴る‘という歌詞が４回出てきます。被爆者は、二度とあの８月９日に起きた出来事をおこさないでという願いと共に、長崎の復興も願っていたのだと思いました。長崎市長の長崎平和宣言は、原爆のおそろしさ、被爆者の願いがこもっていて、とても心に響きました。これからは私たちが被爆者の思いを受け継ぎ、訴えていかなければならないと実感しました。

３．平和の旅を通して

被爆体験講話で深堀さんは、何をしている時が一番幸せですか？という質問に対して、「平凡だとしても、何にも恐れることなく朝起きて一日を過ごすのが幸せです」とおっしゃっていました。そんな私たちから見れば今は当たり前の毎日を途切れさせないためにも、長崎での「あの日」が最後になるように、原爆や戦争のない世界を私たち日本人が世界に訴えなければならないのではないでしょうか。

長崎平和の旅で感じたこと

西台中学校　2年　　内藤　優葉

72年前の悲劇、それはコードネーム「ファットマン」という、たった一発の原子爆弾により、長崎の街は一瞬にして破壊され、7万4千人を超える方々が亡くなりました。

【被爆者の体験談を伺う】

被爆体験の語り部、深堀譲治さんは、14歳の時に軍事工場で作業中に被爆しました。爆心地から 600mの所にいた母、弟、妹は亡くなってしまいました。原爆が炸裂した時に発したピンクがかった白い強烈な閃光は、今でも忘れられないそうです。

当時は国民に何も知らされず、ただ戦争に参加した結果、罪もない人々が原爆など、取り返しのつかない大きな犠牲を背負う事になりました。だからこそ、平和と言われている現在も、国が暴走しないようにしっかりと監視していく必要があると仰っていました。

【被爆建造物を訪ねて】

私たちは、浦上天主堂と爆心地公園に行きました。天主堂の入口には、被爆して破壊された教会の一部と3体の石像「聖セシリア像、イエスの聖心像、頭部が壊れているため不明の像」がありました。その顔はとても苦痛で、悲しそうな目に見えたのが印象的でした。

爆心地公園では、落下中心点を示す石碑と被爆当時の地層（保存展示）を見ました。黒く焼けた地層には、茶わんやガラス片、屋根瓦などがあり、そこに人々が生活していた痕跡を見る事が出来ました。たった一発の爆弾によって、何もかもが消え去った事を思うと、本当に恐ろしくなりました。

【平和祈念式典に参列して】

8月9日は、平和祈念式典に参列しました。テレビで見たことがある光景でしたが、いざ自分がこの厳かな雰囲気の中に参列させて頂けた事を思うと、とても緊張しました。
特に平和について強い口調で話されていた田上富久長崎市長の「平和宣言」がとても心に残りました。

私がこの三日間で感じた事は、人々が平和を思う気持ちはとても強いという事です。しかし、現実として核兵器廃絶が進まないなど、真の平和が遠い事も事実です。平和都市板橋区の代表として学んできた事を、同世代や後輩たちにしっかりと伝えて参ります。

引率して下さいました先生や職員の方々、そして板橋区役所の皆様、長崎でお世話をして下さいました皆様、本当にありがとうございました。今回の貴重な体験を私の人生に役立てて行きたいと思います。平和を深く理解する事が出来た素晴らしい旅でした。

平和をつないでいく

中台中学校　２年　佐藤　彩愛

１９４５年８月９日午前１１時２分、長崎に原子爆弾が投下されました。一瞬にして、７万人の命を、長崎の街を奪い去りました。その日、長崎では何が起こったのか。私は、今回の平和の旅を通して、このことをたくさんの人に伝えていかなければならないと思いました。

〈青少年ピースフォーラム〉

私たちは、被爆当時１４歳だった深堀譲治さんのお話を聞かせていただきました。原爆により、お母様と弟さん２人、そして妹さんが亡くなったそうです。深堀さんは、亡くなっているお母様を見つけたとき，涙が出なかったとおっしゃっていました。私は、このお話を聞き、原爆は亡くなった人だけではなく、生き残った人たちの心も傷つけ、壊していくのだと改めて思いました。

被爆建造物などを回るフィールドワークでは、浦上天主堂遺壁の一部の壁が爆風による影響で指４本分ほどもずれており、爆風の威力がとても大きかったとわかりました。

〈平和祈念式典〉

平和祈念式典には、多くの人が参列していました。平和を願っている人がたくさんいると感じました。しかし、現在でも世界ではテロなどが起き，多くの人が亡くなっています。平和を願っている人がいても，世界中の人の平和への意識がない限り、平和な世界は訪れないのだと思いました。

「平和のバトンを途切れさせることなく」これは，長崎市の田上富久市長の長崎平和宣言での言葉です。この言葉を聞いて、私たちの世代が、平和のバトンをつないでいくためにも、７２年前の戦争のことを伝えていかなくてはならないと思いました。

〈長崎原爆資料館〉

長崎原爆資料館では、原爆が長崎に落とされた理由や、長崎に落とされた原爆の特徴、熱線や放射線の被害などを学ぶことができました。特に印象に残ったことは、原爆投下後の治療方法です。原爆投下後、川の水などは使えなかったため、海水を大きな窯で沸騰させ、治療に使っていたそうです。しかし、薬なども不足していて、しっかりとした治療ができなかったそうです。今の時代では考えられないことですが、原爆投下後は、治療ができないことが当たり前のことになっていたそうです。満足な治療ができない状況をつくってしまう戦争の恐ろしさが、改めてわかりました。

私は、今回の長崎平和の旅に参加して、改めて、戦争や原爆の恐ろしさ、平和の大切さがわかりました。被爆者の平均年齢は、今年で８１歳を超えました。悲しく、つらい思いをしてきた人たちの、命や気持ちを無駄にしないためにも、戦争、原爆、そして平和について伝えていこうと思います。

核兵器が使われないことを願って

上板橋第一中学校　２年　常盤　侑那

１９４５年８月９日午前１１時０２分、長崎の空に原子爆弾が投下されました。

あの日から７２年の夏、私は長崎に行き、多くのことを学ぶことができました。

１日目のピースフォーラムでは、当時１４歳だった深堀譲治さんから被爆体験を聞きました。深堀さんは、勤労奉仕のため働いていた、工場で被爆しました。火の海を避け、やっとの思いで家に帰ると、お母さんが亡くなっていたそうです。生きて会うことのできた弟も数日後に「兄ちゃん、死ぬなよ。」という言葉を残して、亡くなってしまったそうです。原子雲の下で実際何が起きていたのかを深堀さんの体験を通して感じることができました。被爆者の平均年齢は８１歳を超え、数年後には被爆者の方々から直接お話を伺うことは難しくなることを考えると、貴重なお話を聞くことができたと思います。フィールドワークでは今も長崎に残っている原爆の爪痕を見ました。浦上天主堂にあるマリア像は祈っている指が欠けており、本当にこの場所に原爆が落とされたのだなと実感することができました。ピースフォーラムを通して戦争は恐ろしいものだということを痛感しました。

２日目の原爆犠牲者慰霊平和祈念式典では、たくさんの人々が参列して、世界の平和を願っていることができました。外国の方々も参列していて、海外でも原爆への関心が高いことを再確認しました。

３日目の長崎原爆資料館の見学では、原子爆弾の模型や原爆で変形したガラス瓶等や原子爆弾投下後の長崎で撮られた写真などが展示してありました。原爆資料館で一番印象に残ったのは原子爆弾の模型です。アメリカ軍は１００％の確率で原子爆弾を炸裂させるためにたくさんの工夫をしていました。そして、たった一つの原子爆弾だけでたくさんの尊い命が奪われ、７２年経った今でも苦しんでいる人がいることに衝撃を受けました。

先日、国連で採択された「核兵器禁止条約」に日本政府は賛成するものだと私は思っていました。しかし、日本政府は賛成しませんでした。世界で唯一の戦争被爆国であり、被爆者がいる日本が、なぜ賛成しなかったのでしょうか。核の傘に守られていたとしても、日本政府は、参加し、賛成するべきだったのではなかったのでしょうか。私がテレビで見た長崎の原爆に関する番組の中で、「核兵器禁止条約」の制定交渉会議で、空席となった「ＪＡＰＡＮ」の机の上には白い折り鶴が置かれていました。その羽には「**wish you were here** ≪あなた方にここにいてほしかった≫」というメッセージが書かれていました。被爆者の方々ばかりではなく多くの人々がどのように感じたのか、私はとても悲しくなりました。

この旅で私は、戦争の悲惨さ、平和の尊さなどたくさんのことを学ぶことができました。決して核兵器が使われないことを願いながら、学んだことをたくさんの人に伝えたいと思います。

平和な未来のために

上板橋第二中学校　２年　槇野　壮倖

・<u>被爆体験講話</u>

被爆者である深堀譲治さんのお話を聞いたとき、まず当時１４歳という年齢で被爆したことに衝撃を受けました。１４歳ということは、僕と同い年ということです。戦争が無ければ普通の中学２年生として青春を楽しんでいたはずです。僕には一瞬にして家族と家、友達、そして自分の居場所を失うなんて想像もできません。それに、僕ならそんな悲劇から立ち直ることもできないと思いました。今回の被爆体験講話を通して戦争や原爆の恐ろしさを痛感し、平和のために、二度と繰り返してはならないと感じました。

・<u>平和祈念像</u>

平和祈念像の体勢は、「空に向かって高く垂直に掲げた右手は原爆の恐ろしさを」「水平に伸ばした左手は平和を」「立てた足は救った命を」「横にした足は原爆投下直後の長崎の静けさを」「軽く閉じた瞼は犠牲者の冥福への祈りを」それぞれ表しています。平和にかける思いが、僕の心にも響きました。また、右手の先端に付いている避雷針は、陰ながらに長崎の平和を守っているように思えました。

・<u>平和祈念式典</u>

僕は最初の被爆者合唱の「もう二度と」を聞き、とても感動しました。もう二度と被爆者を作らないで欲しいという思いを、寺田一通さん作詞・作曲の歌にのせて届けてくれました。

「黙とう」

７２年前、原爆が落とされたのと同じ１１時０２分に、式典に参加している人々、そして長崎市民が平和を祈り、目を閉じました。たった数秒でしたが、平和を願う思いが僕のこころに強く刻まれた数秒でした。

・<u>長崎原爆資料館</u>

原爆資料館の展示室に入ってまず目にしたものは、７２年前からずっと１１時０２分で止まり続けている時計です。原爆によって即死した方々の時間も、その時を境に止まってしまったと思うと、悲しく苦しい気持ちになりました。その他にも、足の裏から取れたガラス片や食べる前の白米が炭になったお弁当など色々なものが展示されていました

僕はこの3日間を通して、本当にたくさんのことを学ばせていただきました。戦争や原爆の恐ろしさはもちろんのこと、「普通」の生活に対する感謝の気持ちを知ることができました。そして「平和な未来のために」そのことをたくさんの人に伝えていきたいと思っています。

長崎平和の旅で学び、感じたこと

上板橋第三中学校　２年　満留　未森

＜はじめに＞

今回このような貴重な経験をさせていただき、本当にありがとうございました。原爆の恐ろしさ、むごさ、戦争の悲惨さ、そして平和の尊さを学び、感じた 3 日間でした。特に、平和な世界を作るために活動されている方々との出逢いはとても心に残り、ひたむきなまなざしや言葉に、心が揺さぶられました。自分より年下の人や年齢が変わらない人たちが平和について深く考え、自分の意見をもち、強い意志で行動していることに驚きました。

＜被爆者の体験講話＞

たった 1 発の原子爆弾は、一瞬にして多くの大切な命を奪い、人々の暮らしがあった街も破壊しました。語り部の深堀譲治さんは、14 歳の時に原爆によって弟さんを 2 人、妹さん、そしてお母さんを亡くされました。今の私とあまり変わらない年頃に、筆舌に尽くしがたい経験をされている…。そのお話を聞いた時、私は言葉がみつかりませんでした。そして、深堀さんが「写真では臭いや色、温度が伝わらないので、当時の状況のすべては伝えきることができない…」とつぶやかれた時、はっとしました。臭い、色、温度…。本や資料ではわからないけれど、確かにその時、そこにあったこと、どんな状況だったのかを想像することの大切さに気づいたからです。そして、深堀さんが強く訴えていた「原爆を絶対使わせてはいけない」「平和な世界を祈っている」という言葉を、こんどは深堀さんの話を聞いた私が、一人でも多くの人に伝えていきたいと思いました。

＜平和祈念式典＞

被爆者代表の深堀好敏さんのお話しも胸に響きました。深堀さんが被爆したのは 16 歳のときでした。原爆によってお姉さんを亡くし、「世界が終わる」とまで感じた壮絶な悲しみを体験されました。深堀さんの「核は人類と共存できない」という言葉、そして長崎市長の「最も怖いのは無関心なこと、そして忘れていくことです」という言葉を聞き、私は、原爆は地球上にあってはならない、そして平和のバトンを途切れさせることなく未来へつないでいくために、このつらい過去を風化させてはならないと思いました。

＜長崎平和の旅を終えて＞

同じ過ちを二度と繰り返さないために、みんなが仲よくできる世界をつくるために、長崎平和の旅で経験したことを決して忘れずに、わかり合い、助け合い、支え合い、つながり合うことを大切にして生きていきたいと思います。

平和と幸せを知った３日間

桜川中学校　２年　大見　恋己

戦争が終わってから７２年がたち、語り継ぐ人も年々少なくなっています。

私がこの旅に参加したのは、教科書にのっていることだけではない過去の悲劇を知り、今まで目を背けていた戦争、平和と向き合う事が目的でした。今ではこの旅で学んだことを胸に刻み平和の尊さを伝えていこうと思っています。

＊被爆者のお話＊

平和の旅１日目に被爆者、深堀譲治さんから当時のお話を聞きました。それは想像以上の悲劇さであり、とても生々しいもので正直聞いているのが苦しくなるほどでした。

深堀さんは４人兄弟で１９４５年８月９日、長崎に原子力爆弾が投下され、母と弟、妹を亡くしました。当時１４歳という若い年齢で働いていたため、兄弟には少ししか会えなかったそうです。その弟からの最後の言葉が“兄ちゃん死ぬなよ”。私はこれを聞いてとても胸が苦しくなりました。泣きたくなりました。

今、私には２人の姉と小学校３年生の妹がいます。普段何気なく話していられる事がどれだけ幸せなものか知らされました。

＊私が考える平和＊

戦争が終わり７２年経ち、日本国憲法をつくり平和を守って私たちは日々暮らしています。今でもしっかり戦争について考えなければいけません。今だからこそわかることもあると思います。世界各国のリーダーの方々には被爆地を訪れてほしいと切に願います。戦争がないのはもちろんですが忘れないこと、関心を持つことが“平和”だと私は考えています。被爆者の皆さんは思い出したくない辛い事を一生懸命話してくれました。次は私達が平和のバトンを途切れさせることのないよう、戦争について伝えていきたいです。
とても貴重な３日間でした。

永遠の平和のために

向原中学校　２年　大谷　千鶴

1945 年 8 月 9 日 11 時 02 分。長崎に『ファットマン』と呼ばれる一つの原子爆弾が投下されました。長崎は一瞬で火の海と化しました。72 年経つ今でも爪痕は残っています。しかし、最近は『戦争』や『原爆』という言葉は、時代と共に風化してしまっているという現状があります。この旅を行くことになる前までは私も実感がわきませんでした。けれど、この旅を通して日本人として、これからの時代を築いていく者として、事実をもっと知っておかなければならないと気づかされました。

【被爆体験講話】

被爆体験講話では、当時 14 歳だった深堀譲治さんのお話を伺ってきました。深堀さんは、原爆の爆心地の近くにいた母、弟 2 人、妹の 4 人を亡くしました。原爆が落ちた直後は全体がピンク色だったとおっしゃっていました。その後爆心地から 2 ㎞までは爆風で家が壊れ、1 ㎞のあたりのものは灰になり何もない状態だったそうです。いくつもの死体が転がっており死体で躓くこともあったそうです。焼けただれた人にハエが卵を産んで蛆虫が体の中にいることもあったそうです。そんな恐ろしい経験をした深堀さんが、今一番幸せだと感じることは「平凡な生活ができていること」だそうです。深堀さんの話を聞き、今の生活では考えられないことが 72 年前は起きていたんだなと思いました。

【平和祈念式典】

平和祈念式典に参加してまず驚いたことは被爆者だけで結成された合唱団があったことです。初めに被爆者合唱があり思いが詰まった歌声が聴けました。献水、献花をして 11 時 02 分その場にいた全員が立ち、1 分間の黙とうを行いました。そのあとは長崎平和宣言、平和への誓い、児童合唱、来賓挨拶、高校生合唱がありました。有名な方のお言葉や、平和への誓いでは『原爆は二度と繰り返してはならない。』という気持ちが強く伝わってきました。私はその気持ちを今の世代、次の世代、また次の世代に伝えていかなければならないなと確信しました。

この 3 日間を通して、私は貴重な経験をし、平和の尊さなどの沢山の事を学んできました。その学んだことを周りの方々に間違えがないよう伝えていきます。そして、日本のための、世界のための平和を考えながら『戦争』『原爆』のことを考えたりなどといった 1 人 1 人出来ることをコツコツとしていこうと思いました。

最後になりましたが、貴重な経験、沢山の学習をできる場所設けてくださった板橋区役所の方々や長崎の関係者、先生方、家族に感謝申し上げます。ありがとうございました。

長崎で、私が感じたこと

赤塚第一中学校　２年　丸山　莉加

今から 72 年前のこと、当時何があったか詳しく知りたい、そんな気持ちでこの長崎平和の旅に参加しました。実際に行ってみると、そこで見たもの、聞いたものはとても悲しく悲惨なものであり、本当にあったと信じたくないもの、知るのが怖くなるものばかりでした。しかし、このことは次の世代へと絶対に伝えなくてはいけない大切なことでもありました。

この旅の中で一番心に残っているのは、青少年ピースフォーラムでの被爆体験講話です。1945 年 8 月 9 日午前 11 時前、空襲警報が解除されたにも関わらず、空からたくさんの飛行機の音が聞こえ違和感を覚えたと、当時 14 歳だった深堀譲治さんは仰っていました。そして、午前 11 時 2 分、ピカッとピンク色の光、バーンという音。上を見ると真っ赤になっている空。家に帰ろうと歩いていくと山などが燃え火の海になっている町。これから先に何も起こっていないように、と願いながら瓦礫の中を歩き、やっとの思いで家にたどり着くと、そこには変わり果てた自分のお母さんの姿。そんな家族の姿を見た人々は涙も出ず、ただ家族を前に立ちすくむだけだったと仰いました。原爆で医師はおらず薬もなくなり、火傷を負っても寝ていることしかできず、縫わなくてはいけない傷も縫えず、原爆が原因の病気も治療できず多くの人が亡くなり、その中で弟も亡くす。そんな体験をした深堀さんは、朝、目が覚め平凡な日々を送ることが一番の幸せであり、また、核兵器は絶対に使用してはいけない、将来のためにも核のない世界を作りみんなで平和を作るべきだと力強く仰っていました。お話を聞き、私たちが当たり前のように過ごしている今は平和だからこそ幸せで、このことを続けられるように私たちが積極的に戦争について知ろうとしなければいけないと思いました。

2 日目の平和祈念式典でも、お話一つ一つが心に響き、特に長崎市長の田上富久さんのお話の中で「被爆者が、心と体の痛みに耐えながら語ってくれるのは、人類の一員として私たちの一員として、私たちの未来を守るために、懸命に伝えようとしてくれているからです」と仰っているのが印象に残りました。「その願いにより条約が生まれ、また『被爆者のいる時代』の終わりは近づいています」と聞いたとき、私たちがやらなくてはならないことは「伝えていくこと」、「関心を持つこと」なのだと思いました。そして、お話しをして下さった被爆者の方に感謝の気持ちでいっぱいになりました。

3 日目の原爆資料館で感じたことは一発の爆弾の恐ろしさです。当時を撮った写真、そこに写る人々は焼けて黒くなり、誰なのかわからなくなっており、強い熱線で板に影が残る人や草木など色々なものを一瞬にして原爆が奪っていったことがわかりました。

3 日間を通して、平和とは何かを考えました。それは、今ある大切なものを失ってしまうことに怯えず暮らすことができる毎日のことだと思います。それを壊してしまうのが戦争。原爆のことを知り、当時の様子を想像してみると誰もが怖いと思うはずです。また戦争が起こらないために、原爆が長崎に投下されたことを多くの人に興味を持ってもらうこと、考えてもらうことが大切だと改めて思いました。

平和のバトン

赤塚第二中学校　２年　川邉　優里奈

1945 年 8 月 9 日午前 11 時 2 分。長崎に原爆が落とされ、一瞬で焼け野原となり多くの人の命が奪われました。長崎を最後の被爆地にするために、現地で実際に自分の目で見て『平和』について考えたいと思いこの旅に参加しました。

一日目は、被爆者の深堀譲治さんのお話を聞きました。14 歳の時に被爆して家族 4 人を失ってしまいました。弟が亡くなる直前「兄ちゃん、死ぬなよ！」と言った言葉がなんとも寂しかったそうです。大切な家族が一瞬にしていなくなるなんて、今の私には想像することができません。深堀さんのお話から、改めて戦争の恐ろしさや悲惨さ、そして平和の尊さが伝わってきました。

二日目は、平和祈念式典に参加しました。長崎市長の田上富久さんが長崎平和宣言で「ノーモア　ヒバクシャ」という言葉を紹介していました。この言葉は長崎の被爆者、山口仙二さんが被爆者代表として国連で演説の中で言ったものであり、二度と核兵器による惨禍を繰り返してはならないという核兵器廃絶運動の原点を表した言葉です。この言葉から、核兵器を絶対に使ってはいけないという強い思いが伝わってきました。

三日目は、原爆資料館・追悼平和祈念館に行きました。原爆資料館では、たくさんの写真や実物を見て、原爆の恐ろしさを痛感しました。特にガラスが突き刺さった作業衣を見たときは、すさまじい爆風に吹き飛ばされ、散弾のような無数のガラス片や木片を全身に浴びてすごい威力だったんだろうなと衝撃を受けました。また追悼平和祈念館では、被爆者の方々のご冥福をお祈りすることができました。どちらの場所も原爆や平和について深く考え直す場所でした。

私は今回、「核」「戦争」「平和」についてたくさん学び、たくさん感じました。絶対に風化させてはいけない『平和のバトン』を次の世代へと引き継いでいくことが大切です。そのために、私は身近な家族や友達に原爆の恐ろしさを語り継いで『平和』を守り続けていきたいです。

最後に、板橋区役所の皆様、先生方、このような貴重な体験をさせていただき、本当にありがとうございました。

ナガサキを最後の被爆地に

赤塚第三中学校　２年　西嶋　千里

みなさんは平和について考えたことがありますか？

今なら私は自信をもって 「はい」 と答えることができます。しかし平和の旅に参加する前の私には、答えることができなかったかもしれません。私は長崎平和の旅に参加するまで、戦争や原爆のことを、どこか他人事のように考えていました。それでは、いくら戦争について調べても平和を考えることにはなりません。この三日間で、それを実感しました。

＜被爆体験講話＞

私が三日間で特に印象に残っているのがこの講話です。実際に被爆された方のお話には重みがあり、考えさせられることばかりでした。深堀さんは、15 歳の時に被爆され、母と兄弟 3 人をなくされました。母親は自宅のあった場所で見つかりましたが、変わり果てた姿に涙さえ出なかったそうです。また、生きて再会できた弟も「兄ちゃん死ぬなよ。」そう言って数日後に亡くなったそうです。そのような壮絶なお話を聞いて、原爆はそこにいた人たちの大切なものを、一瞬にして奪っていくのだなと思いました。

深堀さんが幸せだと感じる瞬間は、**「朝起きて、何も変わっていなくて、平凡な日常があること」**だそうです。私たちにとっての当たり前こそが幸せだと、ハッキリと答えていたのがとても印象に残っています。

＜平和祈念式典＞

二日目に参加した平和祈念式典では、11 時 2 分に黙とうをしました。72 年前のこの時に原爆が投下されたということを、今までで一番身近に感じた瞬間でした。鐘の音以外何も聞こえないはずなのに、72 年前の音が聞こえてくるような感覚を覚えました。実際に参加して、被爆された方やそのご遺族の思いがたくさんつまった式典なのだと思いました。

長崎は世界最後の被爆地で、その過去は決して消すことができません。しかし、その過去を二度と繰り返さないことはできるはずです。講話をしてくださった深堀さんや、式典に参加した多くの人々は全員が**「ナガサキを最後の被爆地に」**と願っています。その願いを実現するのは、私たち若い世代の使命でもあります。そのために、これから私は平和の旅で経験したことを多くの人に伝えていきたいと思いました。平和の旅に参加した私たちには、学んだことを伝える義務があると思っています。

三日間の短い間でしたが、自分の成長につながる貴重な体験ができたと思います。

伝えていく

～あの日を繰り返さないために～

高島第一中学校　２年　流石　風香

14 歳。被爆体験講話をして下さった深堀譲治さんの被爆当時の年齢です。大切な家族を一瞬にして失った、辛く苦しい思いを私たちのために話して下さいました。

深堀さんは、母、中学 1 年と小学 5 年の弟、5 歳の妹を原爆により亡くしました。私が深堀さんの話を聞いて、印象に残ったのは

「実際に体験しないとあの悲劇はわからない」

という言葉です。この言葉を聞いて、私の頭の中に、自分の家族や友人が思い浮かびました。もし、戦争が起きたらと思うと怖い気持ちでいっぱいになりました。そして、戦争は深い悲しみだけを残すものだと改めて感じました。

『のどが乾いてたまりませんでした　水にはあぶらのようなものが一面に浮いていました　どうしても水が欲しくて　とうとうあぶらの浮いたまま飲みました。』

平和公園の平和の泉の正面にある石碑に山口幸子さん（当時 9 歳）の手記の一部が刻み込まれていました。被爆された人々は、水を一番欲しがっていましたが、原爆による熱で水のほとんどが蒸発してしまいました。そのため、あぶらの浮いた水さえも貴重でした。真夏の長崎県。今ではどこにでもある水が無く、水があれば助かった命もあったかと思うと本当に当時の苦しい叫びが聞こえてきそうでした。

世界には、まだ約 1 万 4900 発の核弾頭があります。原爆は、とても残酷で非人道的な兵器です。日本は唯一の被爆国であるため、これからも核の廃絶に努めていかなくてはいけません。そして、悲しい事実に目を背けず過去のあやまちをもう繰り返さないということ、いつまでも忘れずに伝えていくということが大切だと思いました。

私は今回の長崎平和の旅で、原爆の悲惨さを知り、「平和の尊さ、命の大切さ」を学ぶことができました。このような機会を下さった先生方、板橋区役所の皆様、本当にありがとうございました。

ナガサキを忘れてはならない

高島第二中学校　２年　針金　秀明

今から 72 年前の 1945 年 8 月 9 日 11 時 2 分に長崎に投下された 1 発の原子爆弾により、長崎の町は一瞬にして廃墟と化しました。

僕は原爆の恐ろしさや平和とは何かを学ぶために長崎平和の旅に参加しました。この旅では被爆者講話、平和祈念式典への出席、献花や折鶴の奉納、原爆資料館の見学などの多くの貴重な経験をしました。

初日は青少年ピースフォーラムの開会行事に参加し、被爆者の深堀譲治さんの壮絶な体験を聞きました。深堀さんは原爆によって母と弟、妹をなくされ、かろうじて生きていたもう一人の弟さんも放射線の影響で亡くなりました。この時弟さんは「兄ちゃん、死ぬなよ」といって亡くなったそうです。この時の深堀さんの状況を自分に置き換えてみると、とても生きていけないと思うほどのものでした。

2 日目は平和祈念式典に出席し、献水、献花を行った後、黙とうをしました。そのあと田上富久長崎市長が長崎平和宣言を行いました。田上市長は平和宣言の一説で「最も怖い事は無関心なこと」とおっしゃいました。この言葉を聞いて戦争の歴史が忘れ去られず、被爆者や戦争経験者からの平和のバトンをつないでいけるよう、学校の代表として皆に少しでも関心を持ってもらう努力をしなければならないと思いました。

3 日目は長崎原爆資料館を訪れ、多くの資料や、原爆によって破壊されたものを見学しました。その中でも特に印象的だったのがこの時計です。この時計は長崎に原爆が投下された 11 時 2 分を指したまま 72 年前からずっと止まったままです。他にも熱線によって焼けただれた背中や、放射線によって髪が抜け落ちた少女の頭の写真といったものを通し、原爆のすさまじさや、非人道性を痛感しました。

最後に、この長崎平和の旅で僕が一番感じたことは私たちのように戦争を経験していない世代が、戦争や平和に関心を持たなければならないということです。年々被爆者や戦争経験者の高齢化が進み、被爆者の平均年齢は 81 歳を超えています。私たちが被爆者の生の声を聞ける最後の世代であり、そして被爆者の声を将来へ伝える世代でもあるのです。私たちは、被爆者の願いである核廃絶に向けて動いていかなければなりません。そして絶対にヒロシマ・ナガサキを繰り返さないよう常に関心を持たなければならないと思いました。

平和であることの幸せ

平和を祈る子の像

高島第三中学校　２年　深田　萌

何故、このような戦争をしなければならなかったのだろうか。

14 歳の頃に被爆された深堀譲治さんのお話を聞いて感じました。当時、深堀さんは人手不足のため、工場で働かされていました。中学校に入ってすぐに軍隊教育で、本物の銃を持たされ、訓練の毎日。今の私と同じ年齢です。自由もなく、「国のため」と言って縛られ、大人と同じようにできなければならない、今の私には到底できることではありません。そんなことを当たり前のようにやらされていて、本当に辛く、苦しい日々だったと思います。

原子爆弾

1945 年 8 月 9 日午前 11 時 2 分

『「ピカッ!」と空にピンクの光が走った』

この日も、深堀さんは、爆心地から少し離れた工場で働いていました。雲の色が赤、黒、白、と次々に変化する中、防空壕を出入りしたというお話を聞き、想像をはるかに超える恐怖だったのだろうと思いました。長崎の街は全てが爆風で吹き飛び、灰となりました。

原爆が投下されたとき、地表は、太陽の温度とほとんど同じ、3000 度から 4000 度で、人々は全身に火傷を負い、「水、水…」と叫びながら川に飛び込んでいき、川には遺体が折り重なっていたそうです。怪我をしても充分な治療は受けられず、毎日のように人が亡くなるところを目の当たりにする日々が続いたとおっしゃっていました。また、10 日程は配給がなく、飢えていく人もいたそうです。ここで深堀さんは、母親、弟 2 人、妹 1 人を亡くされました。

「何も考えられなかった」「涙も出なかった」

この言葉が印象的でした。家族を亡くした悲しみより、「原爆投下」という非現実的な事実への悲しみ、ショックや怒り、その先の不安といった全てのことの表れだと思います。

「原爆投下」いうほんの一瞬の出来事が、多くの尊い命を奪い、戦後 72 年が経った今も、原爆による後遺症で苦しんでいる方がいらっしゃることを絶対に忘れてはいけないと思います。この原爆によって、誰かが何かの得になったというわけではありません。だから、そのようなことは今後、一切繰り返してはならないと思います。私は、この貴重な被爆者の「生の声」を受け継ぎ、絶対に風化させてはいけないと強く感じました。

私には、毎日話をする家族や友達がいます。満足に食事を取ることもできます。このような普段当たり前にできていることが、「幸せなことである」ということに気付かされました。この幸せなことに感謝しながら、これから 1 歩 1 歩前進していきたいと思いました。

第３部　資料編

広島市原爆死没者慰霊式並びに平和祈念式
HIROSHIMA　PEACE　MEMORIAL　CEREMONY

平成29年（2017年）8 月 6 日

August 6, 2017

広　　島　　市

The City of Hiroshima

式 次 第

Program

開　　式	8：00	**Opening**
原爆死没者名簿奉納	8：00	**Dedication of the Register of the Names of the Fallen Atomic Bomb Victims**
広島市長		Mayor of Hiroshima
遺族代表		Representatives of the bereaved families
式　　辞	8：02	**Address**
広島市議会議長		Chairperson of the Hiroshima City Council
献　　花	8：07	**Dedication of Flowers**
広島市長		Mayor of Hiroshima
広島市議会議長		Chairperson of the Hiroshima City Council
遺族代表・こども代表		Representatives of the bereaved families and children
被爆者代表		Representatives of the atomic bomb survivors
来　賓		Distinguished guests
黙とう・平和の鐘	8：15	**Silent Prayer and Peace Bell**
平和宣言	8：16	**Peace Declaration**
広島市長		Mayor of Hiroshima
放　　鳩		**Release of Doves**
平和への誓い	8：22	**Commitment to Peace**
こども代表		Children's representatives
あいさつ	8：26	**Addresses**
内閣総理大臣		Prime Minister of Japan
広島県知事		Governor of Hiroshima
国際連合事務総長		Secretary General of the United Nations
ひろしま平和の歌（合唱）	8：40	**Hiroshima Peace Song (chorus)**
閉　　式	8：45	**Closing**

平　和　宣　言

皆さん、72年前の今日、８月６日８時15分、広島の空に「絶対悪」が放たれ、立ち昇ったきのこ雲の下で何が起こったかを思い浮かべてみませんか。鋭い閃光がピカーッと走り、凄まじい放射線と熱線。ドーンという地響きと爆風。真っ暗闇の後に現れた景色のそこかしこには、男女の区別もつかないほど黒く焼け焦げて散らばる多数の屍(しかばね)。その間をぬって、髪は縮れ真っ黒い顔をした人々が、焼けただれ裸同然で剝(は)がれた皮膚を垂らし、燃え広がる炎の中を水を求めてさまよう。目の前の川は死体で覆われ、河原は火傷(やけど)した半裸の人で足の踏み場もない。正に地獄です。「絶対悪」である原子爆弾は、きのこ雲の下で罪のない多くの人々に惨(むご)たらしい死をもたらしただけでなく、放射線障害や健康不安など心身に深い傷を残し、社会的な差別や偏見を生じさせ、辛うじて生き延びた人々の人生をも大きく歪めてしまいました。

このような地獄は、決して過去のものではありません。核兵器が存在し、その使用を仄(ほの)めかす為政者がいる限り、いつ何時、遭遇するかもしれないものであり、惨(むご)たらしい目に遭(あ)うのは、あなたかもしれません。

それ故、皆さんには是非とも、被爆者の声を聞いてもらいたいと思います。15歳だった被爆者は、「地獄図の中で亡くなっていった知人、友人のことを偲(しの)ぶと、今でも耐えられない気持ちになります。」と言います。そして、「一人一人が生かされていることの有難さを感じ、慈愛の心、尊敬の念を抱いて周りに接していくことが世界平和実現への一歩ではないでしょうか。」と私たちに問い掛けます。

また、17歳だった被爆者は、「地球が破滅しないよう、核保有国の指導者たちは、核抑止という概念にとらわれず、一刻も早く原水爆を廃絶し、後世の人たちにかけがえのない地球を残すよう誠心誠意努力してほしい。」と語っています。

皆さん、このような被爆者の体験に根差した「良心」への問い掛けと為政者に対する「誠実」な対応への要請を我々のものとし、世界の人々に広げ、そして次の世代に受け渡していこうではありませんか。

為政者の皆さんには、特に、互いに相違点を認め合い、その相違点を克服するための努力を「誠実」に行っていただきたい。また、そのためには、核兵器の非人道性についての認識を深めた上で、自国のことのみに専念して他国を無視することなく、共に生きるための世界をつくる責務があるということを自覚しておくことが重要です。

市民社会は、既に核兵器というものが自国の安全保障にとって何の役にも立たないということを知り尽くし、核を管理することの危うさに気付いてもいます。核兵器の使用は、一発の威力が72年前の数千倍にもなった今、敵対国のみならず自国をも含む全世界の人々を地獄へと突き落とす行為であり、人類として決して許されない行為です。そのような核兵器を保有することは、人類全体に危険を及ぼすための巨額な費用投入にすぎないと言って差し支えありません。

今や世界中からの訪問者が年間170万人を超える平和記念公園ですが、これからもできるだけ多くの人々が訪れ、被爆の実相を見て、被爆者の証言を聴いていただきたい。そして、きのこ雲の下で何が起こったかを知り、被爆者の核兵器廃絶への願いを受け止めた上で、世界中に「共感」の輪を広げていただきたい。特に、若い人たちには、広島を訪れ、非核大使として友情の輪を広げていただきたい。広島は、世界の人々がそのための交流をし、行動を始める場であり続けます。

その広島が会長都市となって世界の7,400を超える都市で構成する平和首長会議は、市民社会において世界中の為政者が、核兵器廃絶に向け、「良心」に基づき国家の枠を超えた「誠実」な対応を行えるような環境づくりを後押ししていきます。

今年７月、国連では、核保有国や核の傘の下にある国々を除く122か国の賛同を得て、核兵器禁止条約を採択し、核兵器廃絶に向かう明確な決意が示されました。こうした中、各国政府は、「核兵器のない世界」に向けた取組を更に前進させなければなりません。

特に、日本政府には、「日本国民は、国家の名誉にかけ、全力をあげてこの崇高な理想と目的を達成することを誓う。」と明記している日本国憲法が掲げる平和主義を体現するためにも、核兵器禁止条約の締結促進を目指して核保有国と非核保有国との橋渡しに本気で取り組んでいただきたい。また、平均年齢が81歳を超えた被爆者をはじめ、放射線の影響により心身に苦しみを抱える多くの人々に寄り添い、その支援策を一層充実するとともに、「黒い雨降雨地域」を拡大するよう強く求めます。

私たちは、原爆犠牲者の御霊に心からの哀悼の誠を捧げ、世界の人々と共に、「絶対悪」である核兵器の廃絶と世界恒久平和の実現に向けて力を尽くすことを誓います。

平成29年（2017年）８月６日

広島市長　松　井　一　實

平和への誓い

原子爆弾が投下される前の広島には、美しい自然がありました。
大好きな人の優しい笑顔、温もりがありました。
一緒に創るはずだった未来がありました。
広島には、当たり前の日常があったのです。

昭和20年（1945年）８月６日 午前８時15分、広島の街は、焼け野原となりました。
広島の街を失ったのです。
多くの命、多くの夢を失ったのです。
当時小学生だった語り部の方は、「亡くなった母と姉を見ても、涙が出なかった」と語ります。
感情までも奪われた人がいたのです。
大切なものを奪われ、心の中に深い傷を負った広島の人々。

しかし、今、広島は人々の笑顔が自然にあふれる街になりました。
草や木であふれ、緑いっぱいの街になりました。
平和都市として、世界中の人に関心をもたれる街となりました。

あのまま、人々があきらめてしまっていたら、
復興への強い思いや願いを捨てていたら、
苦しい中、必死で生きてきた人々がいなければ、今の広島はありません。

平和を考える場所、広島。
平和を誓う場所、広島。
未来を考えるスタートの場所、広島。

未来の人に、戦争の体験は不要です。
しかし、戦争の事実を正しく学ぶことは必要です。

一人一人の命の重みを知ること、互いを認め合うこと、まっすぐ、世界の人々に届く言葉で、
あきらめず、粘り強く伝えていきます。
広島の子どもの私たちが勇気を出し、心と心をつなぐ架け橋を築いていきます。

平成29年（2017年）８月６日

こども代表
広島市立大芝小学校６年　竹舛（たけます）　直柔（なおなり）
広島市立中筋小学校６年　福永（ふくなが）　希実（のぞみ）

Commitment to Peace

August 6, 2017

Hiroshima before the atomic bombing had the beauty of nature, the warmth and kind smiles of loved ones,
a future being built together.
Hiroshima had normal, everyday life.

At 8:15 am on August 6, 1945, Hiroshima became a burnt plain.
The city was lost.
So many lives, so many dreams were lost.
A survivor then in elementary school tells us, “Even looking at my dead mother and sister, I shed no tears.”
They were robbed even of their feelings.
The people of Hiroshima, robbed of their most precious things, carry deep scars in their hearts.

And yet, Hiroshima is again filled naturally with smiles, a city of trees, plants, and green,
a city of peace that draws concern from people around the world.

If Hiroshima’s people had given in,
if they had given up their determination to recover,
if none had struggled through the pain,
Hiroshima would not be what it is today.

A place to think about peace—Hiroshima.
A place to commit to peace—Hiroshima.
A place to start thinking about the future—Hiroshima.

The people of the future don’t need to experience war,
but they do need to learn the facts, the realities of war.

Knowing the importance of each individual life, accepting each other, speaking directly to the people of the world, we will communicate tenaciously, never giving up.
We, children of Hiroshima, will summon the courage to build bridges that connect heart to heart.

Children’s Representatives:
Naonari Takemasu (6th grade, Hiroshima City Oshiba Elementary School)
Nozomi Fukunaga (6th grade, Hiroshima City Nakasuji Elementary School)

平成２９年８月９日
August 9, 2017

被爆 72 周年
長崎原爆犠牲者慰霊平和祈念式典

The 72nd Nagasaki Peace Ceremony

式　次　第		Program
被爆者合唱	１０：３５	Chorus by A-bomb Survivors
開　　式	１０：４０	Commencement
原爆死没者名奉安	１０：４０	Laying to rest of the list of victims who died during the past year
式　　辞	１０：４２	Opening address
献　　水	１０：４６	Water offering
献　　花	１０：４８	Flower offering
黙　と　う	１１：０２	Silent prayer
長崎平和宣言	１１：０３	Nagasaki Peace Declaration
平和への誓い	１１：１３	Pledge for Peace
児 童 合 唱	１１：１８	Children's chorus
来 賓 挨 拶	１１：２３	Addresses
合唱　千羽鶴	１１：３８	Chorus “A Thousand Paper Cranes”
閉　　式	１１：４３	Closing words

目　　次

被爆者合唱…… 1 ページ
司 会 者 名…… 2
献水の採水場所…… 2
原爆死没者名簿登載者数…… 2
式　　辞…… 3 ～ 4
長崎平和宣言…… 5 ～ 8
平和への誓い…… 9 ～10 ページ
児 童 合 唱…… 11
千 羽 鶴（ 歌 ）…… 12
長崎市民平和憲章…… 13 ～ 14
長崎平和宣言<ことばの解説>… 15 ～ 18
平和祈念式典会場周辺図…… 19

長　崎　市
City of Nagasaki

長 崎 平 和 宣 言

「ノーモア　ヒバクシャ」

この言葉は、未来に向けて、世界中の誰も、永久に、核兵器による惨禍を体験することがないように、という被爆者の心からの願いを表したものです。その願いが、この夏、世界の多くの国々を動かし、一つの条約を生み出しました。

核兵器を、使うことはもちろん、持つことも、配備することも禁止した「核兵器禁止条約」が、国連加盟国の６割を超える122か国の賛成で採択されたのです。それは、被爆者が長年積み重ねてきた努力がようやく形になった瞬間でした。

私たちは「ヒバクシャ」の苦しみや努力にも言及したこの条約を「ヒロシマ・ナガサキ条約」と呼びたいと思います。そして、核兵器禁止条約を推進する国々や国連、ＮＧＯなどの、人道に反するものを世界からなくそうとする強い意志と勇気ある行動に深く感謝します。

しかし、これはゴールではありません。今も世界には、15,000発近くの核兵器があります。核兵器を巡る国際情勢は緊張感を増しており、遠くない未来に核兵器が使われるのではないか、という強い不安が広がっています。しかも、核兵器を持つ国々は、この条約に反対しており、私たちが目指す「核兵器のない世界」にたどり着く道筋はまだ見えていません。ようやく生まれたこの条約をいかに活かし、歩みを進めることができるかが、今、人類に問われています。

核兵器を持つ国々と核の傘の下にいる国々に訴えます。

安全保障上、核兵器が必要だと言い続ける限り、核の脅威はなくなりません。核兵器によって国を守ろうとする政策を見直してください。核不拡散条約（ＮＰＴ）は、すべての加盟国に核軍縮の義務を課しているはずです。その義務を果たしてください。世界が勇気ある決断を待っています。

日本政府に訴えます。

核兵器のない世界を目指してリーダーシップをとり、核兵器を持つ国々と持たない国々の橋渡し役を務めると明言しているにも関わらず、核兵器禁止条約の交渉会議にさえ参加しない姿勢を、被爆地は到底理解できません。唯一の戦争被爆国として、核兵器禁止条約への一日も早い参加を目指し、核の傘に依存する政策の見直しを進めてください。日本の参加を国際社会は待っています。

また、二度と戦争をしてはならないと固く決意した日本国憲法の平和の理念と非核三原則の厳守を世界に発信し、核兵器のない世界に向けて前進する具体的方策の一つとして、今こそ「北東アジア非核兵器地帯」構想の検討を求めます。

私たちは決して忘れません。1945年８月９日午前11時２分、今、私たちがいるこの丘の上空で原子爆弾がさく裂し、15万人もの人々が死傷した事実を。

あの日、原爆の凄まじい熱線と爆風によって、長崎の街は一面の焼野原となりました。皮ふが垂れ下がりながらも、家族を探し、さ迷い歩く人々。黒焦げの子どもの傍らで、茫然と立ちすくむ母親。街のあちこちに地獄のような光景がありました。十分な治療も受けられずに、多くの人々が死んでいきました。そして72年経った今でも、放射線の障害が被爆者の体をむしばみ続けています。

原爆は、いつも側にいた大切な家族や友だちの命を無差別に奪い去っただけでなく、生き残った人たちのその後の人生をも無惨に狂わせたのです。

世界各国のリーダーの皆さん。被爆地を訪れてください。

遠い原子雲の上からの視点ではなく、原子雲の下で何が起きたのか、原爆が人間の尊厳をどれほど残酷に踏みにじったのか、あなたの目で見て、耳で聴いて、心で感じてください。もし自分の家族がそこにいたら、と考えてみてください。

人はあまりにもつらく苦しい体験をしたとき、その記憶を封印し、語ろうとはしません。語るためには思い出さなければならないからです。それでも被爆者が、心と体の痛みに耐えながら体験を語ってくれるのは、人類の一員として、私たちの未来を守るために、懸命に伝えようと決意しているからです。

世界中のすべての人に呼びかけます。最も怖いのは無関心なこと、そして忘れていくことです。戦争体験者や被爆者からの平和のバトンを途切れさせることなく未来へつないでいきましょう。

今、長崎では平和首長会議の総会が開かれています。世界の7,400の都市が参加するこのネットワークには、戦争や内戦などつらい記憶を持つまちの代表も大勢参加しています。被爆者が私たちに示してくれたように、小さなまちの平和を願う思いも、力を合わせれば、そしてあきらめなければ、世界を動かす力になることを、ここ長崎から、平和首長会議の仲間たちとともに世界に発信します。そして、被爆者が声をからして訴え続けてきた「長崎を最後の被爆地に」という言葉が、人類共通の願いであり、意志であることを示します。

被爆者の平均年齢は81歳を超えました。「被爆者がいる時代」の終わりが近づいています。日本政府には、被爆者のさらなる援護の充実と、被爆体験者の救済を求めます。

福島の原発事故から６年が経ちました。長崎は放射能の脅威を経験したまちとして、福島の被災者に寄り添い、応援します。

原子爆弾で亡くなられた方々に心から追悼の意を捧げ、私たち長崎市民は、核兵器のない世界を願う世界の人々と連携して、核兵器廃絶と恒久平和の実現に力を尽くし続けることをここに宣言します。

2017年（平成29年）８月９日

長崎市長　**田　上　富　久**

平 和 へ の 誓 い

1945 年 10 月撮影：林　重男

原爆が投下された1945年８月９日、私は16歳。爆心地から3.6キロ離れた長崎県疎開事務所に学徒動員されていました。11時２分、白い閃光と爆発音を感じ慌てて机の下にもぐり込みました。夕方、帰宅命令が出て、私は学友と２人金比羅山を越えて帰ろうと山の中腹まできたところ、山上から逃げてくる多くのけが人に「山の向こうは一面火の海だから…」と制止され、翌朝、電車の線路に沿って歩き始めました。長崎駅の駅舎は焼け落ち、見慣れた町並みは消えてなくなり、別世界に迷い込んだようでした。ようやく辿りついた山王神社近くの親せきの家は倒壊していました。その中で家の梁を右腕に抱きかかえるような姿で18歳の姉は息絶えていました。あの時、私が無理をしてでも家に帰っていれば、せめて最期に声をかけられたのではないかと、今でも悔やまれてなりません。そのあと大学病院へ向かい、さらに丘を越えると眼下に浦上天主堂が炎上していました。涙があふれ出るとともに怒りを覚え、「ああ、世界が終わる」と思いました。ここ平和公園の横を流れる川には折り重なって死体が浮いていました。私は、三ツ山に疎開していた両親に姉の死を報告し、８月12日、母と弟と３人で材木を井桁に組み、姉の遺体を荼毘に付しました。その日は晴天でした。頭上から真夏の太陽が照りつけ、顔の正面からは熱気と臭気がせまり目がくらみそうでした。母は少し離れた場所で地面を見つめたまま、ただ祈り続けていました。

たった一発の原子爆弾は７万４千人の尊い命を奪い、７万５千人を傷つけました。あの日、爆心地周辺から運よく逃げ延びた人々の中には、助かった喜びも束の間、得体のしれない病魔に襲われ多くが帰らぬ人となりました。なんと恐ろしいことでしょう。私は「核は人類と共存できない」と確信しています。2011年３月、福島第一原子力発電所の事故が発生し国内の原発は一斉に停止され、核の脅威に怯えました。しかし、リスクの巨大さに喘いでいる最中、こともあろうに次々と原発が再稼働しています。地震多発国のわが国にあって如何なる厳しい規制基準も「地震の前では無力」です。原発偏重のエネルギー政策はもっと自然エネルギーに軸足を移すべきではないでしょうか。戦後「平和憲法」を国是として復興したわが国が、アジアの国々をはじめ世界各国から集めた尊敬と信頼は決して失ってはなりません。また、唯一の戦争被爆国として果たすべき責務も忘れてはなりません。

1945 年 8 月 10 日撮影：山端 庸介

私は1979年、原爆で生き残った有志６人で原爆写真の収集を始め、これまでに様々な人たちが撮影した４千枚を超える写真を収集検証してきました。原子雲の下で起きた真実を伝える写真の力を信じ、これからも被爆の実相を伝え、世界の恒久平和と核廃絶のために微力をつくすことを亡くなられた御霊の前に誓います。

2017年（平成29年）８月９日

被爆者代表　**深　堀　好　敏**